貴女
至寶 大全女用文姬鏡

任天田島象二編輯

下

○女用文章もくろく

○年始の文　同
○寒中伺ひの文　同
○雪見に招く文　同
○梅見に招く文　同
○花見に誘ふ文　同
○入梅見舞の文　同
○暑中病問の文　同
○中元の物に　同
○月見に招く文
○神に招く文
○菊に誘ふ文　同
○菊暮れの文　同

和曜文庫

○入學祝のふみ 仝
○婚礼の祝 仝
○稱優のふみ 仝
○病氣見舞の文 仝
○悔狀
○出産の文 仝
○出産祝の文 仝
○招くの書 遠方 仝
○詞書
○仏事と招く文
○出家の文 仝
○出家見舞の文 仝
○別の文 仝
○出家ゐとらせの文 仝

○戯傷中人合せの文 仝
○年賀の祝の文 仝
○茶子入れの文
○物乞ひの文 仝

凡例

一凡そ女文字ハ月〳〵迫も艶あるを願しはきるふてゝ後前の様〳〵心あるゝやゐらせをゝ又めで度の下うかしくゝと かゝゝ大ゐるひゞの事かり柳もまゐるせとハ被進ゝ此方より彼方へ物と被進義又奉のかゝるき詞なりさるゝと 厳未なゝゝ進じやゐらせハ ゐゐるゝ下されまゐらせハ

中つけまゐらせいと書たらんまい最あの〳〵心ある人ハ
笑ひ給ふもやさんそれの〳〵のもとゝ存ぜ雖き文
字さへ作り出さゝ紀つゞるハ一際笑ふ度紀支ゝと此故こ
本文の文よ推〳〵まゐらせいなゞらハ暫く用ゐ給ふとも
其他ゝ皆省けりまゝ〳〵ハ穴〳〵ゝ紀ゝ器とカキクケ
の活ゝ〳〵かゝ〳〵くゝとせ〳〵のゝて此〳〵ことハ恐惶謹言と
今ゝ義ゝ〳〵目出度の下ゝ用ふ詞ゝあらまゝ貴女諸卿
よゝ紀ゝ〳〵ゝ〳〵文ゝ紀ゝを従前のゝらゝめ
給ひ〳〵

編者〳〵るゝ

○十二ヶ月異名

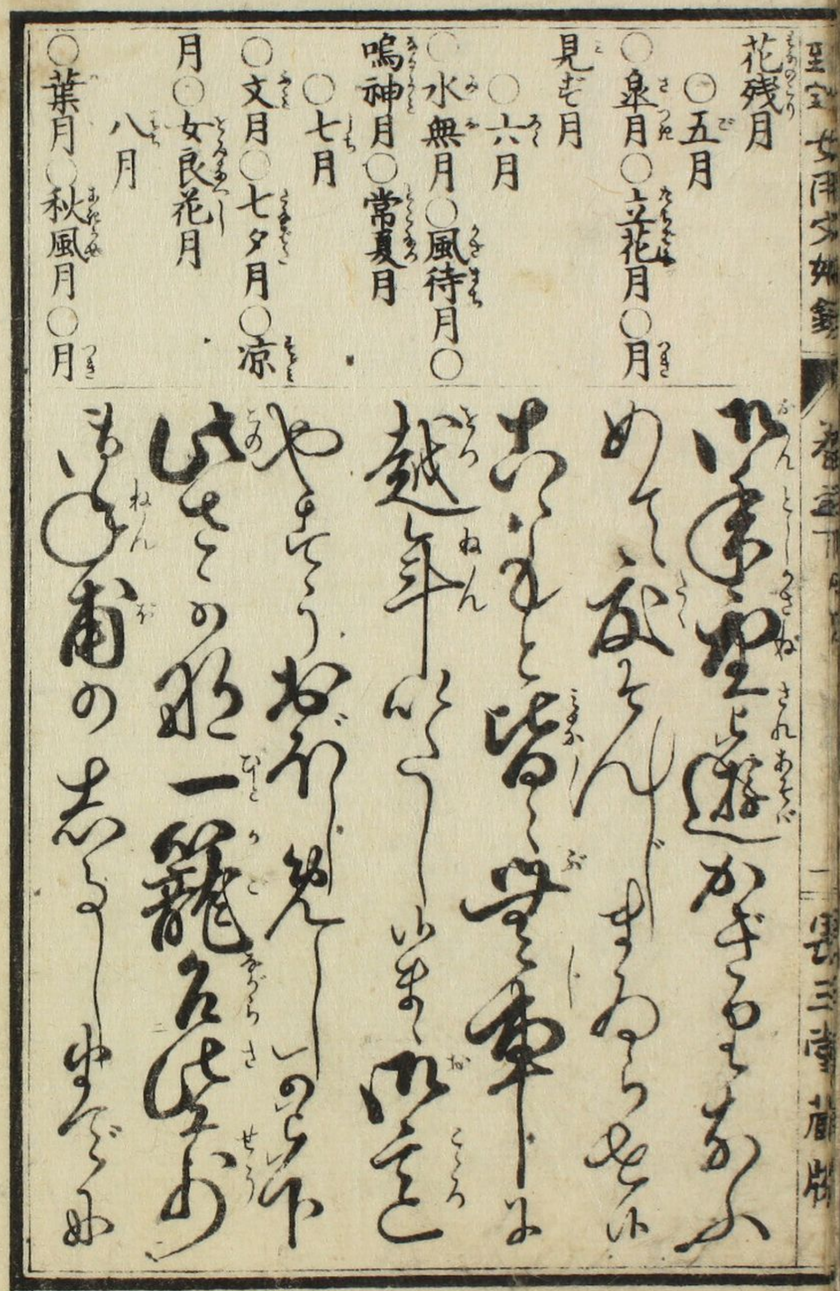
○一月
○睦月○初空月○初見月
○二月
○衣更月○如月○梅見月○小草生月
○三月
○彌生月○櫻月○花見月
○四月
○卯月○卯の花月○

貴女至寶　大至女用文姬鏡　巻下

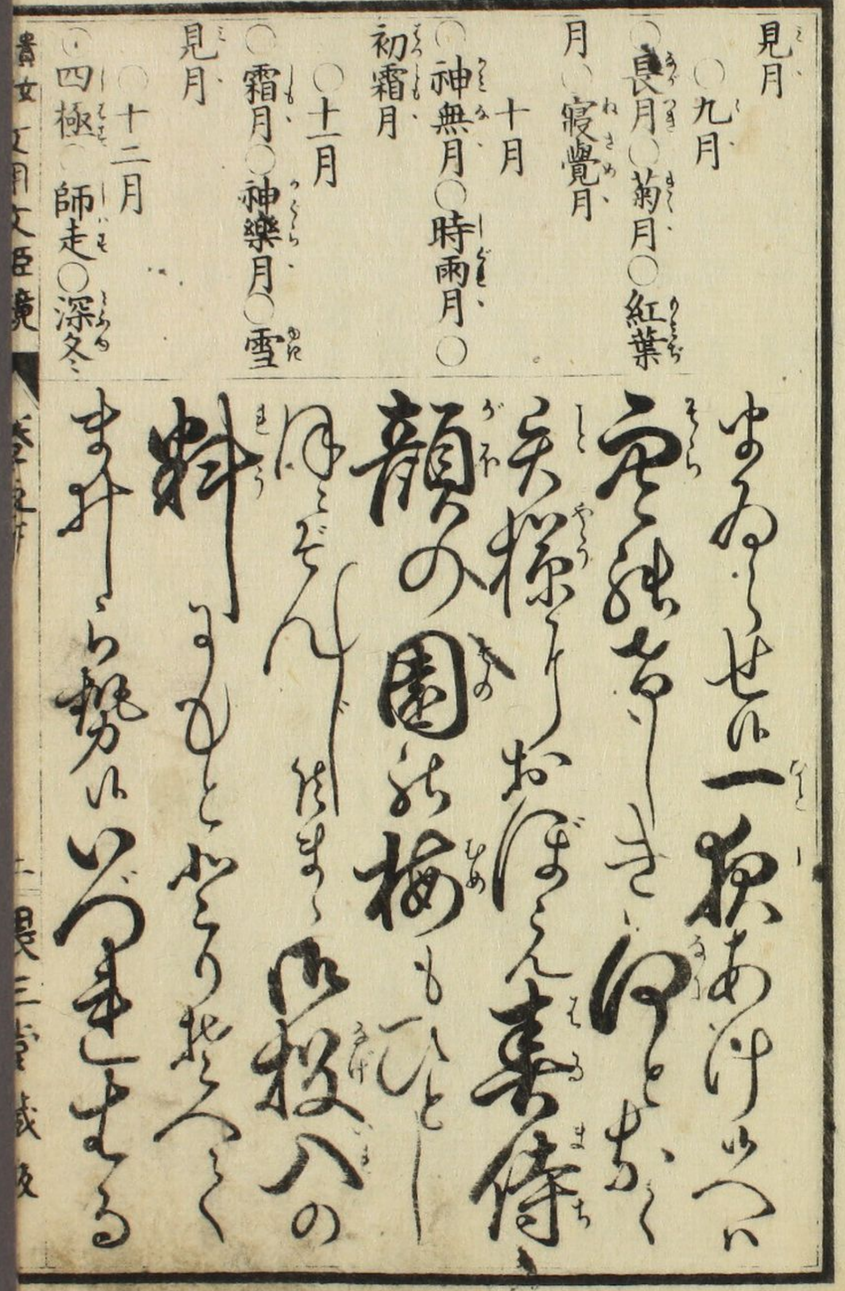
○年始の文

新玉の春の始の吉祥
ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵

花残月
○五月
○泉月○立花月○月
見花月
○六月
○水無月○風待月○
鳴神月○常夏月
○七月
○文月○七夕月○涼
月○女良花月
八月
○葉月○秋風月○月



見月
○九月
○長月○菊月○紅葉
月○寝覚月
十月
○神無月○時雨月○
初霜月
○十一月
○霜月○神楽月○雪
見月
○十二月
○四極○師走○深冬



月〇年惜月

〇女文章正字

女子の文章ハ多く仮名文字を用るりのなきとこゝ、正字を用る事もあれい此ハ假名文字の下ハ正字を附しを臨時の便まそ〻〻

〇熟語

〇あらたまる年の始〇一夜あけるよりのけ〻れ〇明渡るみとりハ空ハ〇松竹の千代をつせぬいろ〻〻あてはらぐたる初日の旗〇年波の立かくりたるくきの静〻き〻鶴亀の千代よろ〻千代〇ゆらたま、新玉〇も〇一夜のやどふそ〻〻ゆく長閑ふ〻〻〻〻〻きろはる、初春〇年くゆ〻〻〻〻〻

○ゐあでのあと、筆跡
○ひもぐ、久々○う
と〳〵〳〵、疎々數○
ちうぐ〳〵、遠々數
○ゐそのぐれ、物遠○
うちたえ、打絶○た
えぐ〳〵れ、絶々數○
○うもぐ、離々○も
るぐ、遥々○ゆる〳〵、
緩々○ちち〳〵、些々
○ゐゆ〳〵〳〵、床數
○ゐあつ〳〵れ、懐々
數○ゐひ〳〵〳〵、戀數
○ゐあこ〳〵を、慕數

目もぐ　皆〳〵　遠を　悦〳〵　結構の中　あ〳〵　依屋

○うひ〳〵れ、初々數
○ゐも〳〵〳〵、馴々數
○たうう、便○たつ
き、便○びんぎ、便宜
○ゐさう、左右○う
けたまはりたく、承
度○きうゆかく、聞
問欲○ゐうもが、然
者○さゆくも、左ゆ
得者○つきゆてゐ、就
候而者○ゐう〳〵、然
○つぎふ、次ゑ○よ
つく、仍而○ゆさ、又
○さてい、扨も○さ

みち〳〵　ようれ　ゐ中　めて

○熟語
○けふと云ば人のかもかつたなりて○きのまくるのと
けさ○ひとゆふ出ゆ下○つのれすても暮ぶべ〳〵
○ゐゆ見物出ゆ下○ゆくるゑ魚○うはてき花○尚
まあぐふゆうと出ゆ上まる〳〵せの○皆〳〵ようく〳〵

なるべし、先程○さも
ど、先文字○いぜん
以前○さなふ、先よ
○さのぜん、最前○
もきらるころ、過頃
○さつた、前方○
ろ、返々○こ
き、呉々○こ、
操返し○なほ〳〵猶
々○かし〳〵、押
返し○こさね〳〵、重
々○かね〳〵、兼々○
こそ、給○いまな、

○文中個の文
年立つまひどもまぐ
佐保姫の春幸なれ年ハ
事たらぬ様おぼへ
きのふより立入る別て
ちもおもしろ山傳も
なうすごせられ嬉しく

戴○ちやう、拜領
○もらひ、貫○やる、
遣○つかはす、遣○
かこる、贈○おんぐる、
進○まゐらす、為進
○わぐる、呈上○あ
ちこ、餘多○ほかう
し、餘々○さの〳〵、
再々○たび〳〵度々
○せつ〳〵、節々又切
○さく〳〵ど、毎度○を
り〳〵、折々○いつも
なごら、作早晩○い
やさし、弥増○あげ

存じまつる扨ハ山京蕪未
なごの〳〵寒年中個〳〵卍し
まで〳〵寒冷〳〵まで去
茶すゐ雪〳〵げて
澤ぶ前栽〳〵梅花
ねぶの来なす紀
いと遲〳〵遲沢の

あげ、繁々○いろ〳〵、色々○さまざま、様々○あれこれ、品々○うきぐ、數々○あまた、種々○あまた、細々○こまく、取々○なに〳〵、内々○やう〳〵、漸々○かな〳〵、必々○ひたすら、閑○ひまなる、暇○ひて、もとゐ、御手透○ひわたり、遊○みな〳〵さま、皆々様○たれ〳〵さま、誰々様○

市廛　よちの　宝財　やう〳〵　程なく　倩　未だ　稀　云ふ　孤　力　丸

○熟語

○年いたつてもとみふ敬り○夢ゆめ程い○今年いまだ○墨ぶちよ○墨ぶちよ○杉〳〵○杉〳〵○杉〳〵

災○おぶ〜、無事○なふごとなく、無何
夏○あめふ、忠よ○
けふげ、氣健○ゐき
げんよく、御機嫌能
○ゐけんお、堅固○
かたりなく、無替○
べつでうなく、無別
條○ゐをめがたり、
物語○ゐをふし、咄
○ゐうちさ、噂○ゐ
ちうし、ゐ申○ゐは
たへ、傳○ことづて、
言傳○おぶ〜ゐ〜

いつも　病ひ　なやこと
はども　年を　ゐ　藤　探して
ことを　ながら　恙なく　暮し
おまゐ　ゐん　めでたく　義
御座　の　ゐ　はや　白
を　ゐら　孫ゆ　なる　寒中
ゐ　の　だ　拝見　ねがひ

よせられ、被思召寄
○ゐおろけられ、
心に被懸○ゐおめ
ふあづる、預ゐ
示○あきから、不
浅○なめあらば、
不斜○ひとたゐ、一
入○べつ〜り、別
而○ゐれぐ
く、難忘○いやめづ
らら、弥珍○ゐおと、
美事○いつま、
美敷○うりゐ〜ゐ、
美敷○そゐと、其

はやと　日　ゐ　折　ゐ　ゐ
近　の　ゐ　ゐ　ゐ　ゐ
第　ゐ　ゐ　ゐ
ゐ　ゐ　ゐ　ゐ

○熟語
○雪ふまぐ、霜ふる堪て畑の麦生の青き沖紀ゆとゐる
斯ぐけ孔と孤入ゐ○杉ぐ音の端も耳ぐゐ
〜○春の来ぬ霜の花○老の孔ゐてきゐ寒
ふぐゐれゐ○れゐ冬ふれん舞岸○いづき
ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜ゐ〜

許○そなゝ、其方○そのそう、其方○そもと、爰元○おなゝ、此方○おなたゝ、此方○ゝなゝ、彼方○うもこれ、彼是○あち、彼處○おち、此處○あそこ、彼所○そ、此所○ここゝ、此所○ここゝ、此所○ここゝ、愛敷○おもらしき、心褒樂敷○いたはけ、懐氣○おんべう、神妙○ちめもと、目文字○ちげん、ちゝ見

○雪見に人を招く文

名ゝ相ハ変更の申空状

古もむさ列丸別る時の

くるの雪い色ぬぎ所ゝ

見い古家内様ハかゝり

ゝ況と人の様ハ

古茶器立

○げんざん、見參○ちめみえ、ちゝ目見え○めどわり、目通り○あふせ、おとゝ、如仰○ちゝ、ゝ乃とわり、ちゝ申通○ちかきつけのごとゝ、如書附○ちをゝろ、ゝ法おとゝ、如目録○こまかゝ、細○つぶさゝ、具ニ○つまびらかゝ、詳ニ○ゝをゝ、委○ちこと、ゝに、支細○つゞま

をつゞきも松ぶ法あり人を

雪見をかゝ抹茶の

なゝさみい

申陰居様ちゝ様を

ちゝ連あそばされ後ニ

頂ゝ入様遊ゝを招

ゝ侍ゝ

ゆるふ、約○あろ〜づゝ、心静○ちらぐ、深々○ゝぞ〜、態々より〜、時々○たゞいま、只今○ちやぐ〜、早々○いちやく、最早○とみふ、頓に○きふふ、急に○ふもかま、俄に○ゝとも、供○ゝとも、伴○いざあひ、誘○ゝさそひ、誘引○ゝつれだち、連立○ゝちそう、馳走○ゝはんそう、奔走○ゝめてあし、饗應○ゝとりはやし、取囃し○ちゝ〜じつ、終日○ひめもす、終日○ゝもすがら、暮迫○ゆめべまで、昨宵迫○たそがれまで、黄昏迫○ゆうべね、祝○ゝちぎり、祝儀○ちぎと、態ち○とりあへず、不取敢○一ちん、一円○ちきと、透ち○さちに、更に○ゝつて、曽而○かつて、

○熟語

○一夜のかぐら玉〜庭とあが○榾の花うと汁り
ちつ雪俗のでん○四方の山〜を白銀の〜紀白玉と
ほ〜〜さまつよ○特燭に近き山〜も春〜〜らまぬ
花き紀燭りちぐりゆもと〜〜〜さのそひ○○も
武源沢りあそせ〜〜○たま〜〜様も山彦ひ合せ

○字で見る面ぐ云

如何なる尽らす雪模
ちつ〜〜の屋ゆ〜〜〜ぐも

〜〜〜様〜〜〜様〜〜〜

ねて、兼而（前方よりのこと、豫るの字正あり）○さうぐ〻敷、難去
○のがれ〻がたき、難道
○かゝあまざる、不叶
○よゞなき、無餘義
○ゆのてがはき、開
敷○ゆとゝけき、支
繁○ゆとりなく、取込
○とりまぎれて、取紛
○やうりぶ、取乱○
ゆうなく、用多○
ゆんざつ、混雑○ゆ
ゆつ〻れ、六ヶ敷○
ゆめづらしく、珍敷

○熟語
○雪を豊年のあらしんものゝ
ゆきのやうなれども○郭公のこゑ
ゆつ〻れ○雪ぬ
つもるのとうち

○まれなる、希成○
けう、希有○たのせ
つ、大切○なふより、
從何○ちようはう、
重宝○ぢ〻ばら、
乍然○さまでも、去
共○さやうなら、乍
去○ぢ〻、暫○ぢ
ば〻らく、
暫く○ゆとつて、今
少○ゆめぢかり、夢斗
○つゆぢつゆ、露斗
○おかつさ、大方○あ
らまし、荒増○あら

○梅花の客を招く文

霞ぢ〻ぶ臺を正して垣
根の梅も笑ひの眉のら
百千鳥の声かなつれ
山里ぬけきもうぐひす
せ〻ら鶯の明るはつ年
ゆかしかなれ

〻、荒々○たいがい、大概○あらかた、荒方○やゞく、頓而○ちらく近々○かつぱけ、追附○わど、なく、無程○そのうち、其内○らちわど此程○ちんぎ、難儀○ちくらう、苦労○ちしんらう、辛労○ちくろづろひ、心遣○ちくろくろづろ、心配○ちひらう、披露○ちとうあし、取

神事

○熟語

○春ろうけつてこ〻〻〻霞こゑん○せちゑ花ゐの春ろうおかぬ一あるこしのぎよう〻あぬん○さえ

成○ちもうしあげ、申上○ちとうはくらひ、取計○ちそこし、少○けいびゝ、輕微○ゆめ〻〻〻、努ゲ間敷○こゝろぐろ、心計○ちくろくろづろ、心添○ちこゝろやすく、ちこ心易○おりひなぐら、作思○ちこゝろぐし、志○ちづゝ、何○やすく、安々○こゝろよく、快○こゝろふけ、懸心○ちもく、

かゝる空のゆく井〻〻あの紀うさく〻ゐ○前栽の梅もやゝ〻と人待顔ふあぬ○鶯の鳴べもゆと珠勝ゐ〻ちこ○さ〻ゐる山鳥ゆくぞ山へ

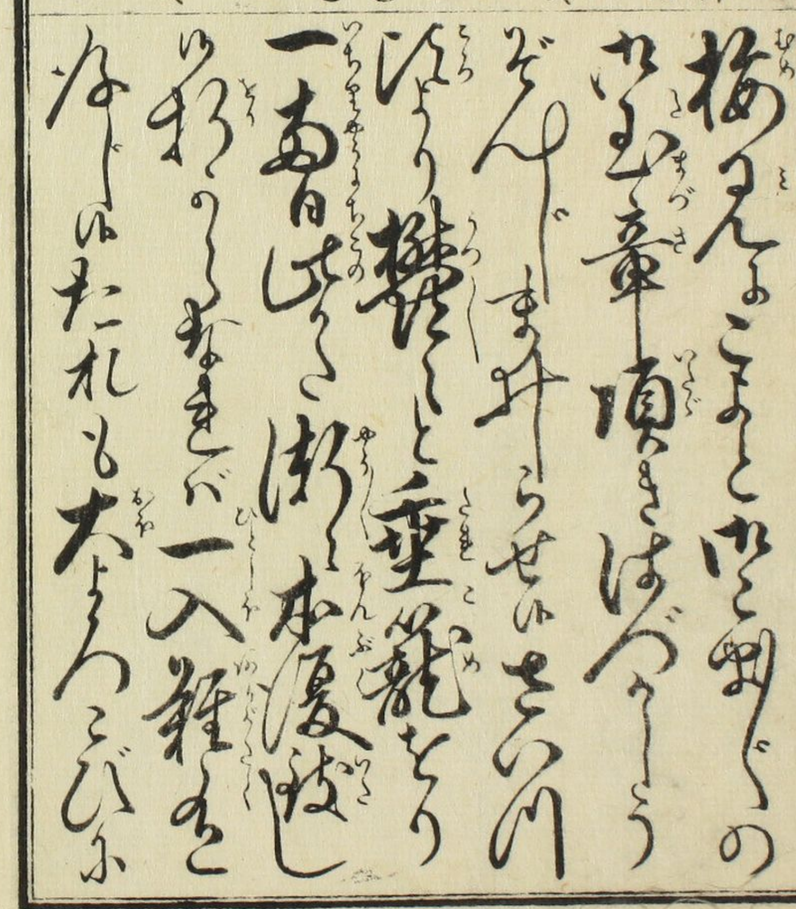
○春ぐれ返る

ゆくぞ人深ぐ〻うゐる

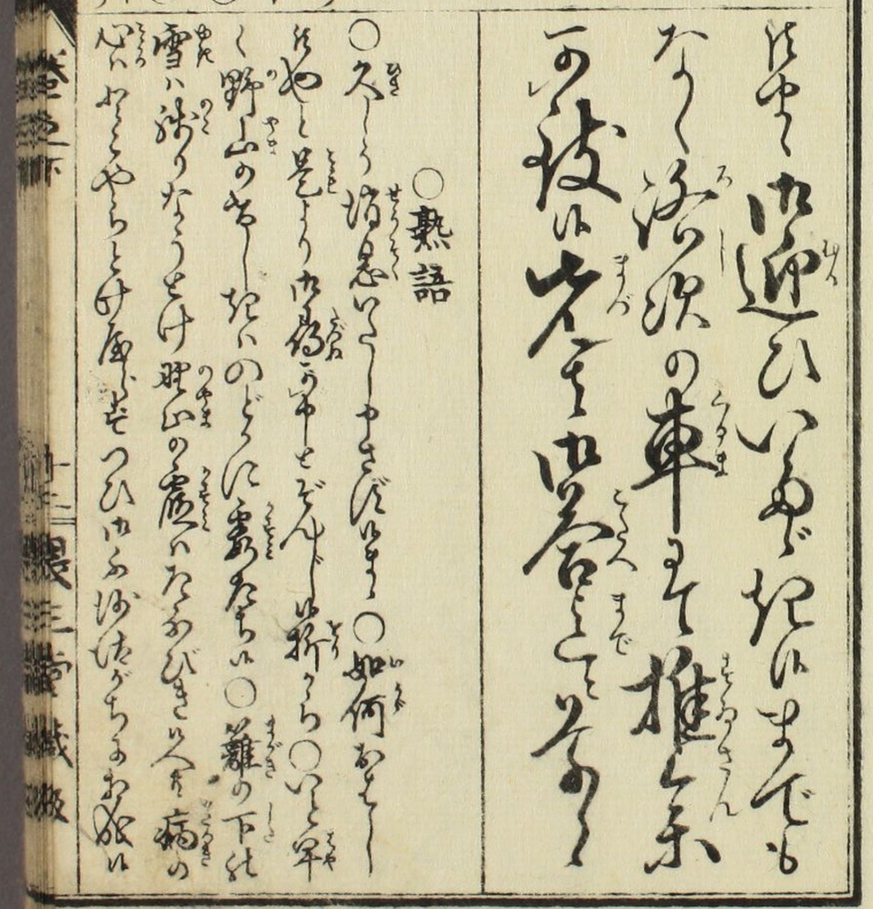
ゆく〻ちたちもゆと

おぐるゆく思ひ春延

平素○いとゞ、如何
○いとゞかり、如何計
○のつゝも、尤○は
ろ〳〵より、從外々○
とても、迚○ひとゝろ、
日比○さんゞよ、産
所○へんきん、平産
○ひんぜん、安産○
たんじやう、誕生○
ちゞゝろ、血心○ひ
ぢち、肥立○かいも
う、介抱○うんびやう、
看病○よ〳〵、夜伽
○おろ〳〵、無心



○ゝゝのき、快氣○
せんゝゝい、全快○
へいゆ、平愈○へい
ぜんのとおり、平生之
通○たつ〳〵や、達者
○たゝたち、兒達○
たもとめで、娘御○
たこゝらだきれ、古
越よ下○ほうもち、
りい、古待居候○み
ね〳〵ゝゝよろ〳〵
く、皆々様ゝ冥利○
めでたく、目出度○
う〳〵、可祝



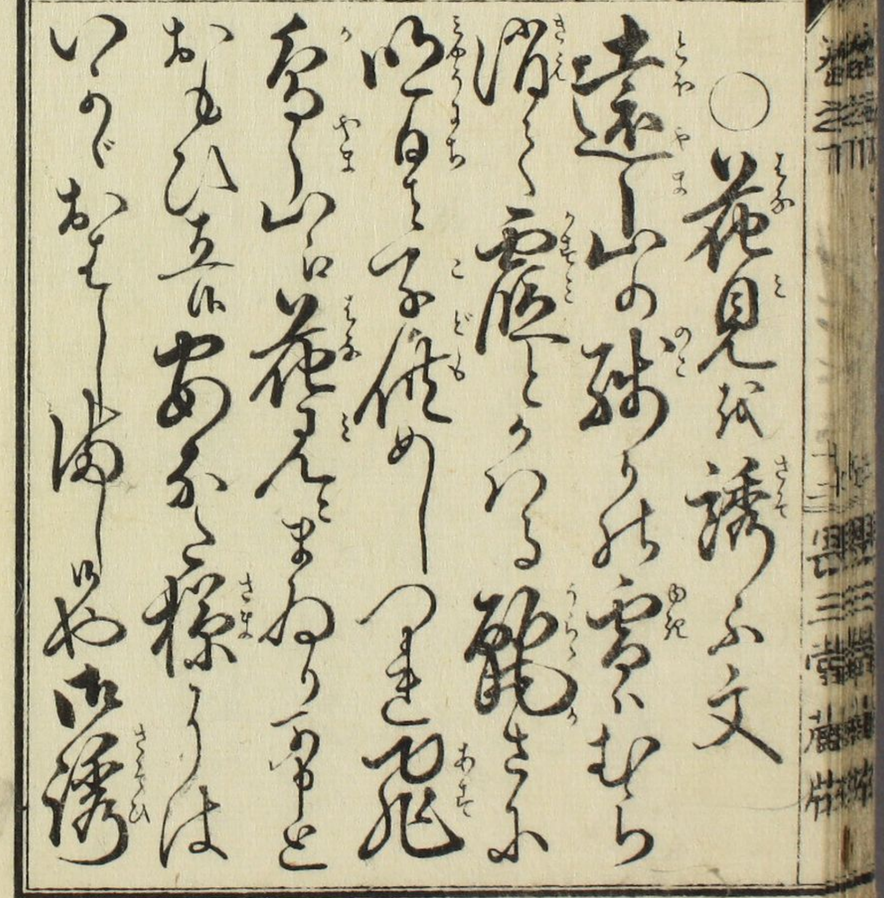
○熟語
○久〳〵ぶり、忘れ〳〵ぶり○如何
ぶり、忘れ〳〵ぶり○
ぶり、忘れ〳〵ぶり○
ぶり、忘れ〳〵ぶり○

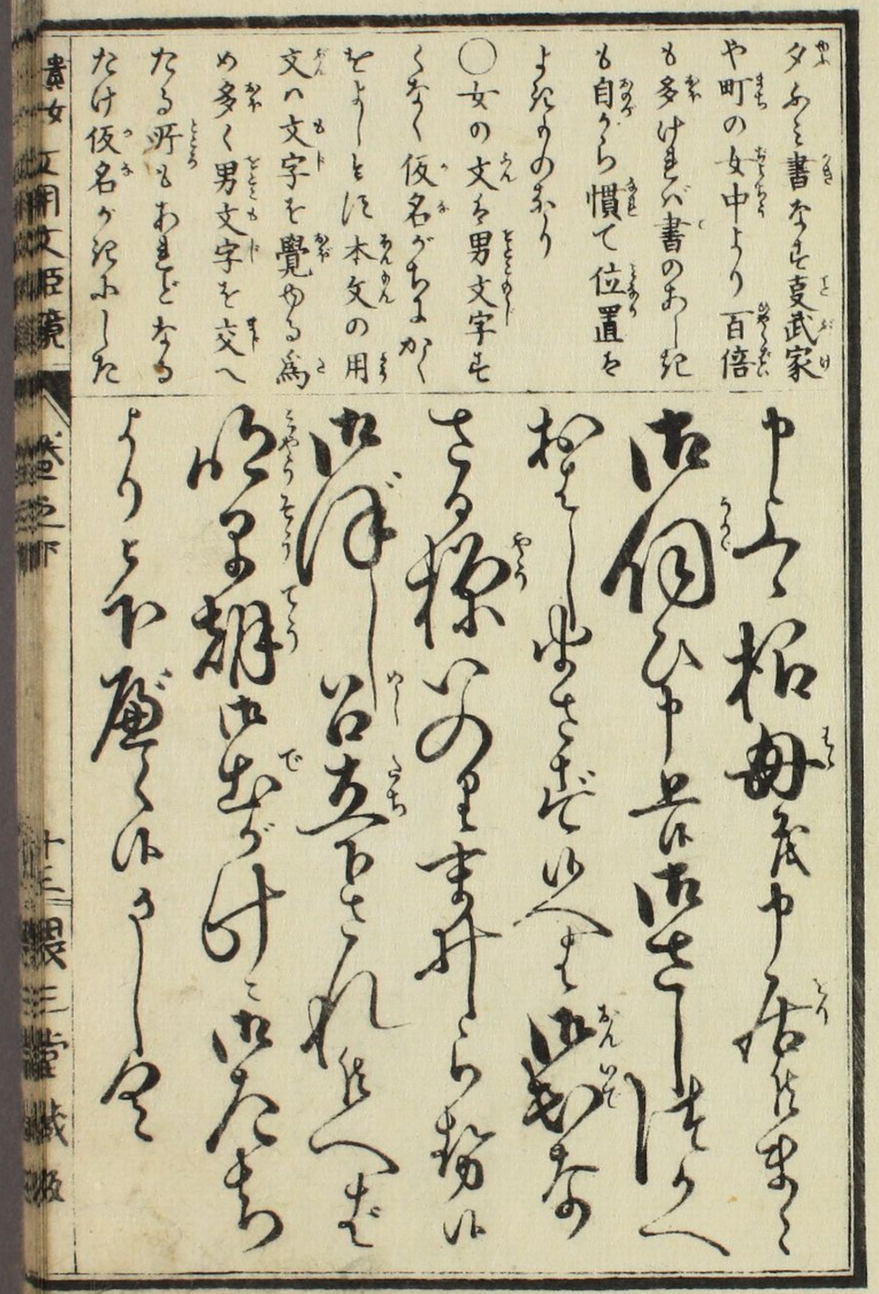
○あとゝ尚々

○玉章認め心得

玉章を書いよゝとも書つゞけ様のよろゝ〜うらぬゝ見かゝるせらるゝものゝあり女重宝記ゝ文章ゝ御所方をまねび文つゝれ手風ゝ京の頃城風を習ひ玉ふべゝとのへゝも此心ゝあるべゝ賤しき者ゝゞら娼妓のたゞひゝ朝夕ゝ書なゝ夏武家や町の女中より百倍も多けもゝ書のゝ紀も自ゝら慣て位置をよゝのゝゝり

○女の文字男文字もくゝ仮名ゞちまかせとゝ本文の用文ゝ文字を覺ゆる爲め多く男文字を交へたる所もあるとなるたけ仮名ゞ紀ふゝた





ものべ〜されど仮名
まてかゝやどきゝ
一二三四五六七八
九十百千万圓銭
厘毛石斗升合夕
貫文
物のゑをいちはさん
ふとぶ仮名ゑきゝ拙〜
むもひとつふゝろ
とのふゝい仮名まて
よ〜上下るかゝ〜もと
かゝふゝ仮名まてる

○熟語

○日ゞ〜ふあゝかよあゝ○きのふゝ孤ち山の
花を笑ものゝちらば散もとめぬさかりけよ〜○公
園の花わゝろ孤ゝめ〜探ゝまてあゝちの虚も
紅の色をそめれ○世の中の春よおゝまゝと野山
のゝろも青ゝ〜ゝうおゝ〜一日遊山なひとゝれ
○とゝのふゝの門なゝ〜きゝば○かちゝゝ人のそゝろ
歩きゝんゝやゝ借ゝ〜きゝよねゝう

○同じくおゝこん
句来の閑を鬼よかゝふ

くゝからぶた金銭米の
數年号月日なゝゝ吳々
るかゝまてかゝ屋ゝ
ばの字もゆの字も仮
名ハゝろゝ〜

○一行の言葉を二行
ふゝりて書ハ其心ゝ〜

春の色のゝ〜〜〜〜〜
なゝ〜〜〜〜〜長閑の空
おゝ〜〜〜〜〜〜〜〜堪
ゝ孫ゝ〜〜〜〜〜〜〜〜
から〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
作〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

取ねてころ〳〵下ゑ
つまちぬやうふぶ〳〵て
書べ〳〵たるこゝ
ゐめめ〳〵のうへを
……ゐめも
じめうく
ゐようをひを
……ゐようを
こび
などゐて書くと見
ぐ〳〵ゐのをり殊更
ゐの字を一行の下ろ

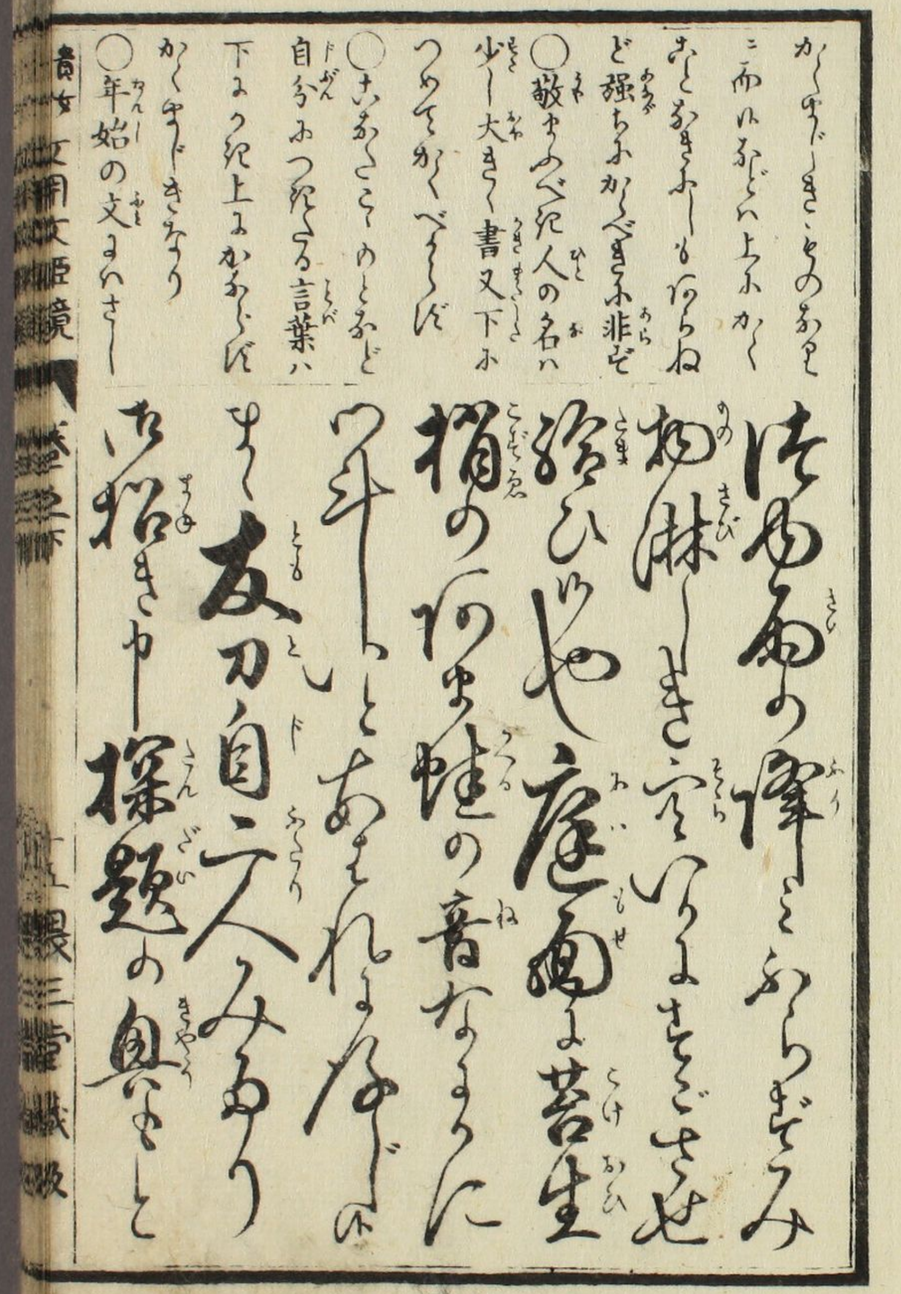
歌屏風

○熟語

○此頃を雪も餘彼あくとけ野山の巖つゝぐ〳〵
なごゝ折うらの市遊山○糸遊のおもひもよらぬ山誘
ゐ下○けふこゝぶいあるい雪をゐ降ふる〳〵と業平
ゐの歌をげまもと知らもいや〳〵○春ゲをみを岩ふ
も庫ゐもなちこめく世い花ゐ結時よなりゐ○大井
川の花の〳〵ら浪雪林院のこゐふまぐふゐぐい弱の
外をせめくいゐ花ゐゐゐの花ゐゐと

○梅を詠ずる文

かくまぐきこゐのゐる
こゐゐゐぐゐ上ふかく
ゐとゐきふ〳〵ゐゐねら
ど強ちふかくべきふ非ぞ
○敬ゐめぐ紀人の名ハ
少〳〵大き〳〵書又下ふ
つゐをかくべ〳〵ば
○ゐかゐとゐゐめゐとゐど
自分ふつ紀ゐる言葉ハ
下ゐゐ紀上ゐかゐぐば
かくゐぐきゐゐ
○年始の文ゐゐさ〳〵



たる用事なりとも返事
ぐれるものゝふれど披
露の文だかりいかゝも
ぐれぬれば敬ひなりと
心得べし

○婚礼の文と悔状の
外凶変の文すい返事書

○熟語

○陰ぐらうて味なるもみせぬきれたもの空稿の真
ならねど味なるてい○冷てらてみ自面の宅○沉黙な
ありきふあぶれ○賛陶きふ堪ねるる○今
年を温氣ふるき稿ぬ○早苗付と養の
小芝もとりのぐきしを中上

ねるべくは書で叶と
ぬるべくは添て申上ぬ
書て申ぬる書べし
あれくさぞくぞ
くもべなど返し詞
を忌べし婚礼の文ふ
かさるいつるらさねて
うまそうるなど皆忌
てかくべくらぞ
○悔状をうぞ墨して
かくべし
○總て女子の文章い

○今年返事
如作賛陶き宅あひ
うち他とり此の山路
会の吉の稿きて
一のうう稿ぬ水
面ふ文蛙ぬ考ぬ
平風流身の人山稿の

優しくおやらなるを以てよくしすれば進物なども大きくこそ確かそもそも其物をさぐぞ重の内に小さなる一折ずつざの又此品ぞ
ちやろげふかく亀一鯛一尾金米糖一折ホを雄々しくこそ見苦しげふう但しその時宜ふようべし

○女の文章ハつのふ

はしふかうこそ何候様
少初花華をうけ申へう
ゆうんりそも

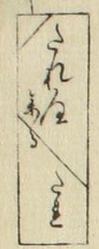
○熟語

○子親の寄をこ考ひまきこそ口かく文化
ちうら○つまくの折ら中文やされ傷石も拝
見の技ひ○ひ中ひ遊ひふあり

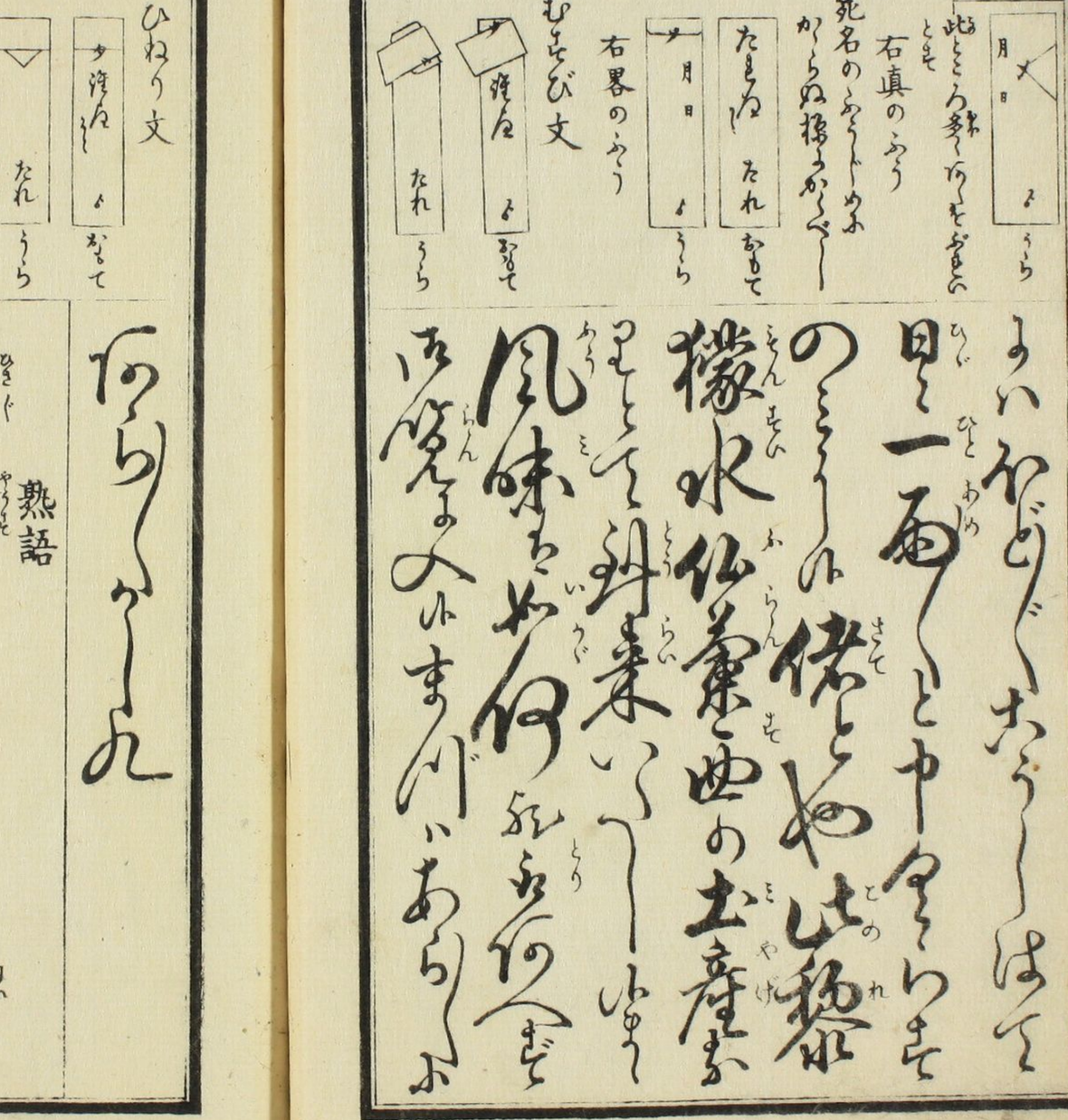
○暑中見舞の文

優ふ艶きぐ善くこそ戀めく詞又ハ琴唄清元常磐津長唄ホの文句様の詞を努々まじめならぞもふ出を新大和詞ぞど心得そらんじてをりく書へ尤も餘り多く用ゆるハ却て悪げふこそ宜うらぞ

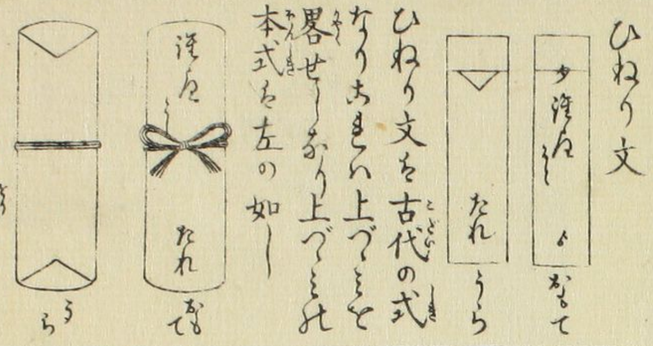
○文の封ドやう



軒端の松ハ青なるこそ
あぐ婦人ハ夢と暑をこそ
吋節ハ成ハ市家四様
ちうそこ乳遊びされこ
市藩おうおこ中
最元無ひ
何ら世あ月を



ひねり文



ひねり文を古代の式なりとも上つかたを畧せ下より上つかたを本式を左の如し

うらをたて折かへし畧伐より三角

畧女 女用文姫鏡

熟語

○久しく逢はぬ人の面影のいつまでも○花鳥風月の○秋の夕べ○うちしの沢の○暑さ寒さ○松風の音○故やりいぶせし紀州が伏屋も夕新枕の夕べ○恋の○恋の○恋の

ふとうぐ

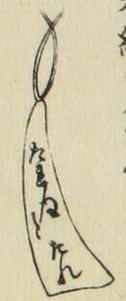
右をたて文といふ奉書の巻いを何ふてもよ〜婚禮祝儀ふ多く

用ゆる本式ハ皆此たて文ありらの〜とて同じ

○同じく返文

雪ぞ跡まろこばしう
おんいもしかは仮是ぞ
三伏やらんまこと夕屋もむしを
あつさ
雲の峰もかをろ丸
僧の巻もわをなのまを

紙を一枚うきねるをう
おんをのうい重ぞうた
終らばまきひらかし
て別の紙うを上づく
をを〜水引ふく結び
文箱ふ收く封をつけ
札紙を付ぞ〜



服つけの文

上々へ
参る人〜
〜〜

打ゆ備ゆ器を出見
者とて出の文
のかい掛かかる品器
ゆきを行ちの籠どん
第せゆ行めのの
二ゆ礼ゆ上ゆまで
一巻出答ゆられゆる

上ハ
中ハ
下ハ

○兒育ちの

兒を小兒を白き糸の如きものすて赤くせんと思へば赤くなり黒くせんと思へば黒くなり總く母親の教方ふよりて善くも惡くもなるものなれば

○熟語

○修の如く志の紀案に仕つまふ於に○次第に何ときおもふ○ども美あう氏を石ゆう仕のとうめて武どんで○う出衣ちら加ゆう武あ川さ

○国もの竹も風ちして杉端の風俗のしづらふ

○美ちの魚出鯨と下雑有ち代ども大ち鯨び老水ち銅ちんわど中○破ち家ふりち生分源

くちあつき出浸ち出ちいぐいや○樹張の孫の

時あちよちぐふち出○池の蓮もゆう〳〵咲きちあ

源う著ちる外ぐ〳〵けの年きも山ち足ち仕て

おり〳〵ちと〳〵出源ちんこ〳〵清石に○系上

出孔ちであり〳〵はちぐ仕て出者えちわらせに

小兒を育つ〳〵母親を呉〳〵も教方を誤らざる樣ふ[illegible]肝要ん此ふ言方のからまを記〳〵心得となる

○小兒を育て教るふ三ツの文あり善一を詭ち古ち並を聞ち支第ち脫道と恩愛ち[illegible]る支茅三ハ威光を示ち支ゑり此三ツの内何もぐ善き

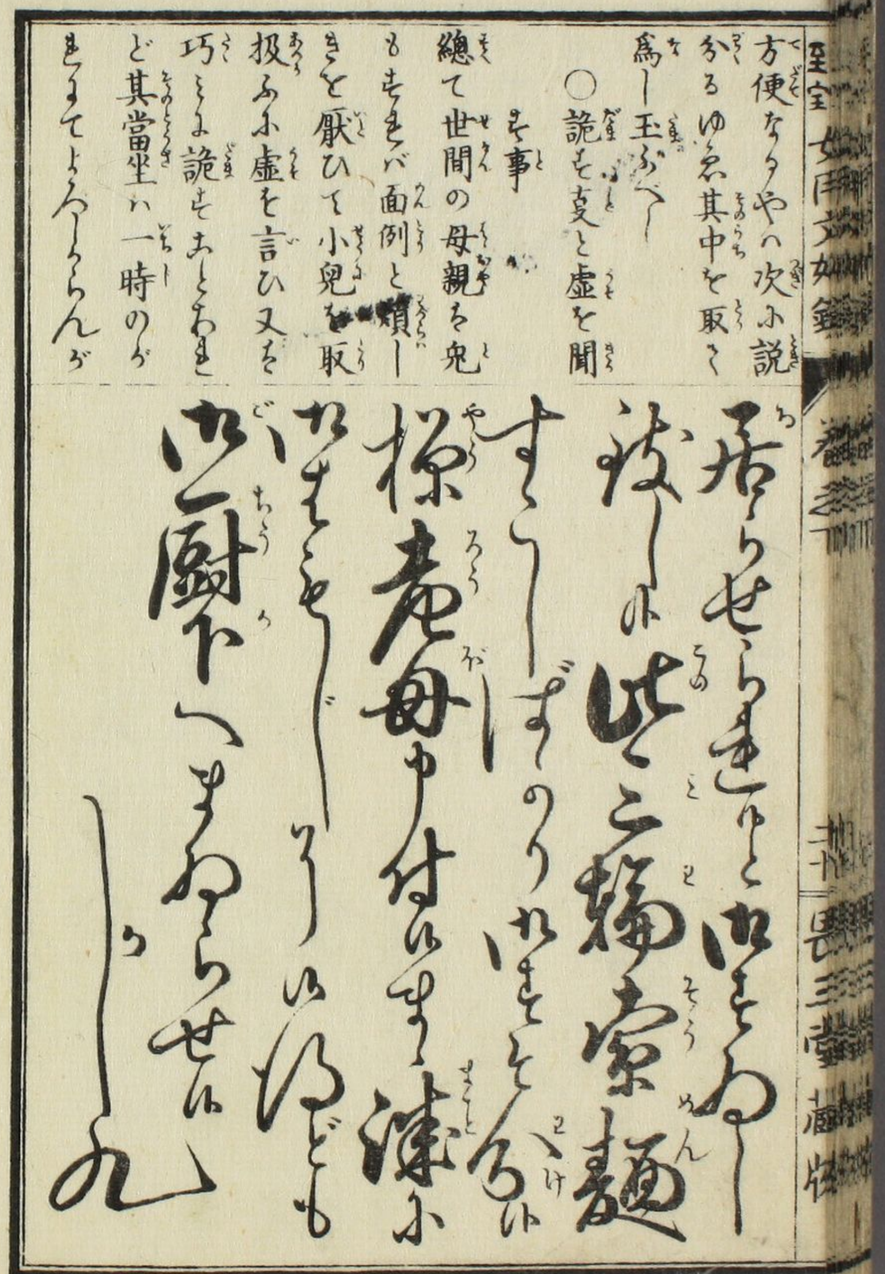
○中元の文

[illegible]

方便なりやゝ次ふ説
ゆゑ其中を取く
爲ー玉ふべ〜

○詭を支と虚を聞
を事

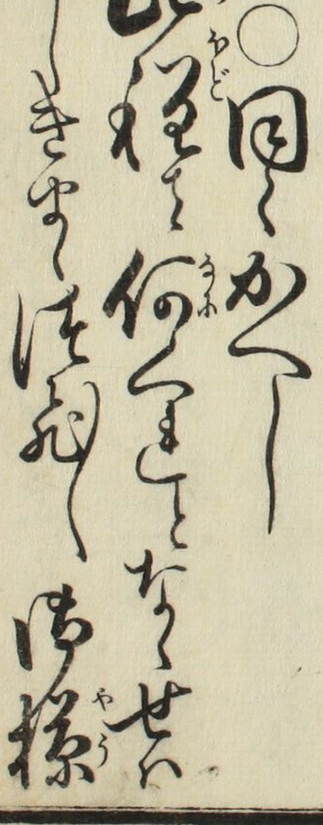
總て世間の母親を兎
もをば面例と賞ー
きと厭ひて小兒を取
扱ふ虚を言ひ又を
巧ふ詭をあとをも
ど其當坐ハ一時のが
まってよふらんが



後々を甚ど害とある
者あり譬へを母親が
他呼ひ往んとをふ
小兒を伴あってハ不
都合なりと考へ心ふ
如何ーを往んと思ふ
時小兒を母親が衣裳
を着更ふるを見をば
母人何處へ行くやと
尋ぬべ〜是を共ふ行
んと思ふなり其時母
を返辭せぜ〜て用意

○熟語

○雨後ふるの天金曲名ふ
あるーりへを○殊勝ふ
させ〜を○をふ
ふ○中元の市祝祭
ふ○縁ふ日ふ
あ〜ぜと○蒸



全く整ひたる子紀小兒ハ向つく坊や一寸御らん綺麗な鳥がお庭へ来るよ早く取をいでと曰バ小兒も

何心なく走りて庭よ

出で之を見るふ鳥の影さへ見へざれバ直よ家へ立戻り見るふ母親をハヤ外ハ出る居ざるゆゑふ小兒ハ残り少あるよ思ふて泣いだ〜暫時あれかぞ斯の如く永き月日ふ間を過るとれい小兒の蟲をひき出そのみあらぞ自然母親の言ぞと疑ゞふ念を起

○孰語

○作せの如く熟平よ始りて淡きがごとく○ろ

〜仮令實事を言ふも終あハ誠とせざるふ至るべ〜誠とせざ〜て言あとを聞ざるとハ已を得ず小言をいひ折檻を加へ門口へ追出し又を戸棚土藏ふ押籠などもする場合ふ至るものなり此もる時ハ其場を一時ふ〜と雖ども度々さ有ると きハ小兒を愈の心を

○中元の供養して門前安寄をも寂ひ寂一かなくの心ゆ出たるなり○海山川の水手付ようかく〜ハ嫌〜どんでまわらせハ○水手付ようハ水手付ようの様ぐ〜ハ水つを出ず〜まゝの初どんもぐ〜そハ待ち〜あげハ

○ほうこを人を招く

相乃ひとふ家業〜ふる業

芭蕉ふる都〜ふ有

潮〜ひやく〜かをなげほうこハ

含と又を恨を殊ふ生を附柔弱のなるまバ乃為ふ悩病を出〜て永年快氣せざる者

なり以上ハ決〜て小兒のあ〜紀ゆ為ふ非ず到底母親ハ虚詭よ

はうも相〜まさづ明日ハ秋の最中天氣もはまじ〜ハ

ばんとわざと時ほうの富の催〜なハ乃ふる様

遠ハ乃つまふ遊ふ夕刻ようハ場〜別荘まで出

り出来し支うらあらん
且物おとよ染り易き
い小兒あるべ後々と
小兒も母親の虚詭を
見習ひ終ふ惡少年と
なるべし

○筋道と恩愛を用
ゆる支

小兒を育て教ゆるふ
い筋道と恩愛うそ肝
要ふ前の譬の如く
母親が他所へ往うん

侍女ばかりの者
皇室と清水と奏とる
人おもしろ若しよせの
少婦様もかの川のの少将
系合奏上遊の花ねぎ求せ

○熟語

○薄の糸をたてとふ機とう雲や織りけん
所をい時帰よ放れ○ひとら行ゆ一門田の
稲も花さ紀の氣の風ふ吹とぐさやとも出洗
ゆ一茶ら稲の木のる秋夕休歌孫

と支ふ虚詭をよん
しからぞとしてまず
吾前へ小兒を呼よせ
菓子など與へ吾い今
他に往よ附け吾子を
連ゆき度ゆくとも
路い遠く且まる小兒
が一所よ往とふ
ならぞ吾子い怜悧な
兒ゆ名彼此ひそび家
よ待て居よ帰りゆい
必らぞよ紀土産を求

萩の上風やあ紀のけきよ○お
べのさゆのと面白うひ○ゆ○移むしの声ら白鶏
の社のかふ風へ松むしの琴を常緑木の下
るあるく得ふ花も紅葉紀たるとふ紅葉
ふそぐもんもあり心をき様よ人ば居んをう
て弱よみ奥きんとどんどゆ山車まて
出入り山結やは○雪雪の垣根よ残りあ紀蛍
飛びふきゆの山里あ紀くゆとも○字治の木の
芽まて夜ふ雪ら落りあるきくどんどゆ人ば
ふ降りげの中ふるとて火りゆのとは
やうねんじゆ

来て子へんも此次の時を一呼ふ連ゆくべーを懇ごろふまぢ

道をひい聞せ恩愛の内ふ威光を含ミて示しなば小兒も道理ふ

納得し往さ兒も耐え忍ぶ者ふう斯の如きい知らぞ識らぞ小兒ふ筋道てふてとろ解しめ且又恩愛の情を覚えさせる者なり此等の方便も其小兒をして後々淳良ふ仕立る最もよ兒教えと謂べー

○威光を示ぞ

母親と小兒の中を最

なりくゝ知間がらなるべく兎もまゝべ母を甘やくゝ小兒を我侭氣隨を云ふものなり此も甚だ何〳〵きゝとふり申ふ母親たる者ハ心ふ何程可愛らしくおもふもみぐるふ面やしべよ出を可らぞ然るをみなりふ出をとゝ兒い小兒を甘やくゝふなをて氣隨

○熟語

○雲ふ風も夜肌を寒うおぼへ○雲ふ風ハ夜肌を寒うおぼへ○雲ふ風ハ夜肌を寒うおぼへ○

なられば家ふ温順く留守してゐよと云て小兒を何ゆゑ連ゆかぬやと聞べし其と兒今ちゐをみとゝゝぬゆゑふ歸て咄さん如何しても連ゆくおとなゝぬ用向ゐまゞ門口ゆで送り来き若し吾子が温順くせざるば吾い吾子と家の内へ閉込て他ふ往べし

○古人の詩ふ曰ぬ

古人の詩ふ曰ぬ

熟語

○吾特のうぶすなの神事ニ付て吉日の一夜酒餅ひしてもねおつゝ也○四月ゝ神殿ふて音備ゑ舞ゆ入遊でもて招ゐ也ゝ

○赤飯ひとゝ重ゆ月の量ゆ

○ゆ物ふ○行もふゝゆゝ一献さしたゝ○餅つけの人形ふども所ゝふしつらへゆし○神事者

と笑顔もてせを取つくひまなゝ様を見もまゞ小兒を叱らもんことゝ怖もて大抵を云ふおゝと聞ものゝ斯の如く常々取扱ひ育てたるゆゑい成長の後わし性質ふふるおと稀なり若し此時小兒を泣て母親を嚇し外ふ往おとゝ止せ又ゝ我心の通

○葉狩を誘ふ文

世渡ゝ時ふ面ゝ樹ゝの梢ふ花ふ紅葉ふ変乃花ふ紅葉ふ

道ゝ道ゝ松茸も

澤ふ澤ふ松茸も

ゝ造ゝの一夜酒の古歌

りふなさんとさるも
母親を怒らせ逆らせ

始めの如く威光を以
て取扱つべ小兒ハ到
底自分の意の如くな
らざるを諦らめ泣き

なぐ持ひめもたせ物ゝ
反ぐそんじ出良人孫子
以下出もき那ひまわらせ
ハ光も楓亭こ出待合せ
ハ中ゝ〳〵

○熟語
○萩の花風そよとのみるまこや樹もいろつき
中ハ○龍田姫をるとふふる錦をえまやと思ひ

止て母親を出きゝ
○以上三ツの中ゝ於
て第一の方便の惡き
ゝ云までもなく第
二の方便ハ縱ひ小兒
ハ其母親を戀ひ慕ふ
ふ相違なけまと通例
試こゝるふ自分の思
様よきるの念あるが
如く又筋道うを小兒
を教ゆるハ未ざ身体
も成長せぬゆゑ道理

たちゆき○菊楓の紅葉ゝたるあるまを道の
ゝ木のゝ生ゝるもなくゝ一日遊ゝ出せやや
ゝ○幸迷ゝ衣ゝるなるも永き秋まゝ
枕もびきを清ゝ書ゝふ廉の夢ゝるまゝ
ゝ清語ゝ出て来きんゝるゝのゝ
ゝ○濡まあの山路なゝの深井の蔦ゝうゝ
ゝ澄の川ゝ紅葉ゝ出の時雨ゝるあけの空
○秋ゝも三人の友ゝ同ゝゝ岸孫も栄
ぶゝ出ゝ○櫻楡ゝ山ゝ皆用ゝ出し
ゝ割ゝ出ゝ○幸の山ゝ燒ゝ暮の
ゝ月ゝ出ゝ出ゝゝゝゝ○時雨の汐の四海
ゝ廉ゝゝゝゝ

を差別する力を發生せざるゆゑ己を得ず両親と威光てふらを與へらるる天の恵なれば此をよく考へ其威光を行ふて偖又母親を猥りに小兒の好と游ぶおとを邪魔さべらば其好と游ぶおとがらの惡き事と見込あべし猶豫せず小兒

○如何なる菊桜の奇なたの
みは紅葉を置て分
なくとも樹を分
落る黄葉の
なる光り
陰に伸ばはま

ふ對して行なべし渾て小兒を教ゆるふい何等の方便を論ぜず愛ふ威光を添へて導く事のつとも肝要の事と知り玉ふべし斯く威光を以て教導せらるる小兒を父母の仰せを能くきく彼我とものの幸と為る法ぞかし

○譬ふ三ツ兒の魂ひ

○熟語

○古へ錦を綾ぬる錦を綾ぬる

○譬ふ三ツ兒の魂ひ

の用事を
少し
拾ひ

百まで と云ふことの
う此を小兒の内ハ覚
へ〳〵い成長の後も
あゐ覚へ〳〵之を爲
得の謂ふて此を慣習

とゝひ又第二の天性

○家の暮の文
[illegible]
[illegible]
[illegible]

を云ふぞ行ひふ不正
のこゝろ〳〵總て物事を
正直ふ行なひ飾らぬ
時を小兒も常ふ見ふ
き聞なもて誠實の慣
習ハ付るものふ昔〳〵
亜米利の農夫ゞジョン
といふ小兒を持しゞ
性質魯鈍ふして常々
父の仰せを用ゆぞ總
て社事を粗畧よせ
ゞ一日父之を叱らん

三嶋堂蔵版

こゝろ〳〵ゞ否々叱らも
とて直る者ふなゝぞ
彼ゞ心の自然ゝら不
正を悔て改めざわゞ
誼ふ〳〵とてジョンと呼
び今日よりゝ以後吾子
ゞ爲したる事ふ粗畧

三嶋堂蔵版

と不正の支あらば其度ゝ釘一本づゝの柱ゝ打ち附け後々吾子が爲しなる粗畧と不正の數を知しめん然ども吾子亦善支をなせあらば一本づゝ抜さり其一本毎ゝ褒美を與へんとおもふの後ち不正粗畧なる毎ゝ釘を打時とゝ一日ゝ數本を打しゝ

千ゝ

年乃

せれ

紙

らまに

事

とあるを然まゝ之を抜しゝ思ふ甚ゞ稀なるしゝ其後ジョン其柱の全く釘ゝ蔽れたるを見て大ゝ嘆き我此計の粗畧不正を爲けるゝと大ゝ愧て夫ゝり父母の仰せい勿論其行ゝひを見習ひ善きゝ心ざゝ惡き遊びや挙行なるゝ其父其釘を抜く

目出たう

細

○熟語

○歳末の出祝儀○出入濟る新歳の風○滿ゝて流れ出る年浪○無出世○滿ゝて流れ○年の内に何とか絵をかもの書ゝ○七年も一日二日○出ぶうちぶ○出無用○出ず寧ゝ無事の出祝儀○東陽ゆゝ出れ上ゝ○出ぬ○出ゝ揚ゝ出ゝ嬢ゝ出ゝ年ゝ出ゝ

度ふそれ〳〵の褒美を與へ〳〵ゞジョンハ褒美を貰ふの嬉しさふまも〳〵善良をなし〳〵ゞ日々〳〵そ〳〵釘を只一本のこりたるもけり此

○孟子曰堯の文
恩惠此程世の孟
子ハ遊され
ハ世質素用こと
世世の孟
子ハ世の孟
子ハ世の孟
子ハ

釘い悉く抜て喜ぶ
とゝ子ども其釘の穴を
猶存して滅なるきわ

ひらぶと云りと此其
寛大なるジョンを取扱
ひく善良の慣習を忽

○全角んど
これ儀学校へあげい
古祝しとて不なまはり
ゝ程なる生つきなるか
ゝ程なるの撒こも
切角ゆきの
ゆきの
ゆきの
ゆきの

ち作り出したるゆゑ
ジョンとして尚其粗畧
不正の痕までも悔ろ
てふいゝらしめ
父母たるものゝ心して
其小兒を育教ふべし

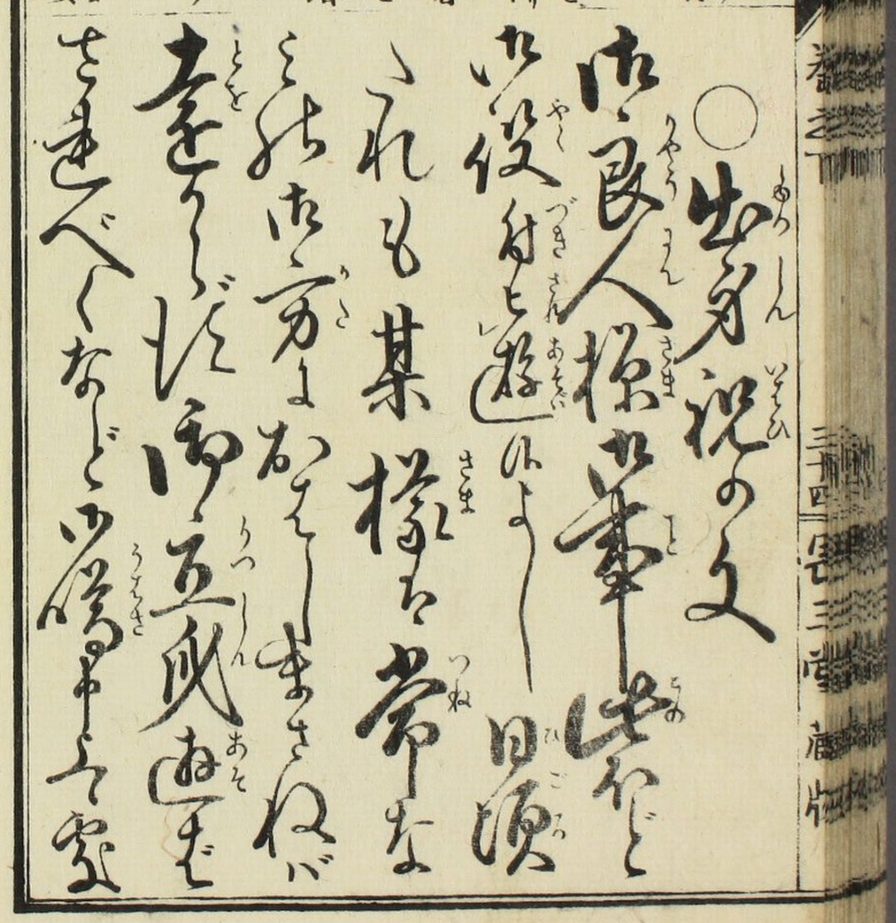
○〔所帯の心得〕
凡そ所帯の締りを衣
食住の三つより成ら
と固より言までもあ
殊ゑ臺所の妻ゑ多し
係まゞ人の妻女たる

思ふ人ども祝の役ゆゑ
ゝ殺ゆまでゝ出蓋こ
所角ゆきの
ゆきの
ゆきの
ゆきの

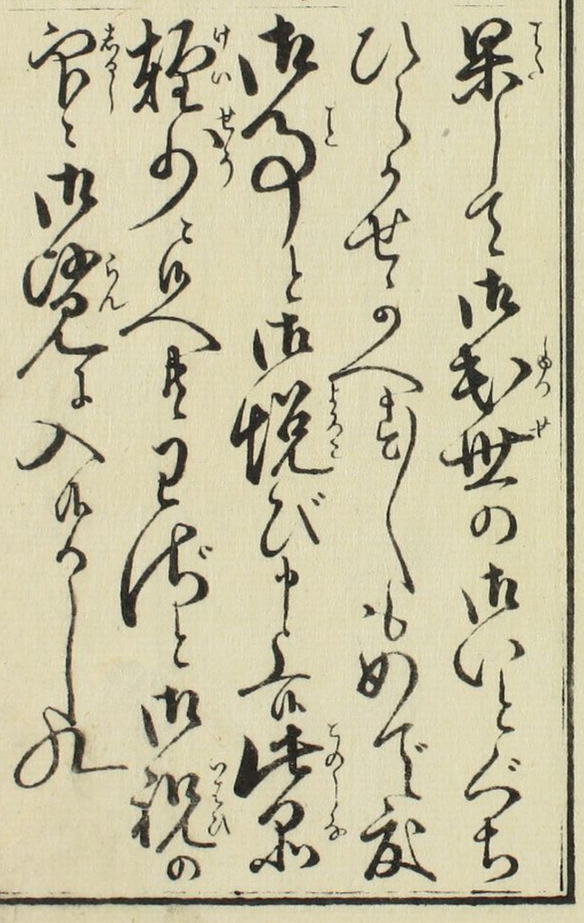
○体のゝ
めてそゝ校ゝあげゝ人をゝふゝゆゝべゝくゝどん
ド○平ゝ八ゝ殺ゝせゝりゝ都て面人ゝたゝめゝど

㊤熟語
ゝ乳ゝせゝうゝせゝふゝ○せ

者々能々臺所の支ふ
氣を配り手落なき樣
ふかゝ玉ふべし
○第一儉約と清潔と
を先ふせざるべ取締
かり難し儉約とい奢
侈の反對にて吝嗇と
異ふ〳〵贅をせぬ謂
なり清潔とい不精ふ
せぬ〳〵にて見得飾り
のなくふわゝぞ
○臺所の用向い下女



の役なまでも任放せ
ざるわゝぞ必らず
妻女が取締して下女
ちたで其指圖ふ從ふ
べき者なり是を少も
徒費あらしめん爲ふ
自ら取まかなうと
なるべし
○洗濯い酷く汚まさ
る前ふなすべし世ま
度々洗濯すれば衣服
の原質と脆くまるもの



○熟語
○度々洗濯

云りのあまご若し洗
濯を怠たるゝ酷く垢
染しと紀洗ゞ長い間
ご痛もみこそらぎれが
其垢ハ落ゞ故ふ
度々淡泊あらふよう
却て原質をそこなる
恐きあり此所をよく
考へ給へ

○洗濯物をそこなわ
ぬ様ゝ干竿をあ紀之を
ゝけ風の爲ふ落ぬ様
心ゞけべし又張物を
そこなわぬ張板をよく
拭ゝ張べし糊を消
そこなわぬ濃ぎ薄そぎ又
い糊塊の出来ぬ様ゝ
心ゞけべし

○洗濯石鹼い用ゐ
後地上又を井戸端ふ
置給ゝらゞ水氣の處
ふ置ゝ勿論あ紀ふ
とゝう

○貯へ米を時々日ふ

○同ゝ云
儀久ゝ有ゝ
ゝ変ゝ有ゝ
ゝ係の世間
ゝはゝ結様仰
ゝ付ゝ生ゝ

曝して濕氣を乾し
虫の付ぬ樣ふせべし
又舂たる米をかわく

貯ふべし夏を殊ふ
虫の生ずること早く
又臭味を生ずるもの

○熟語

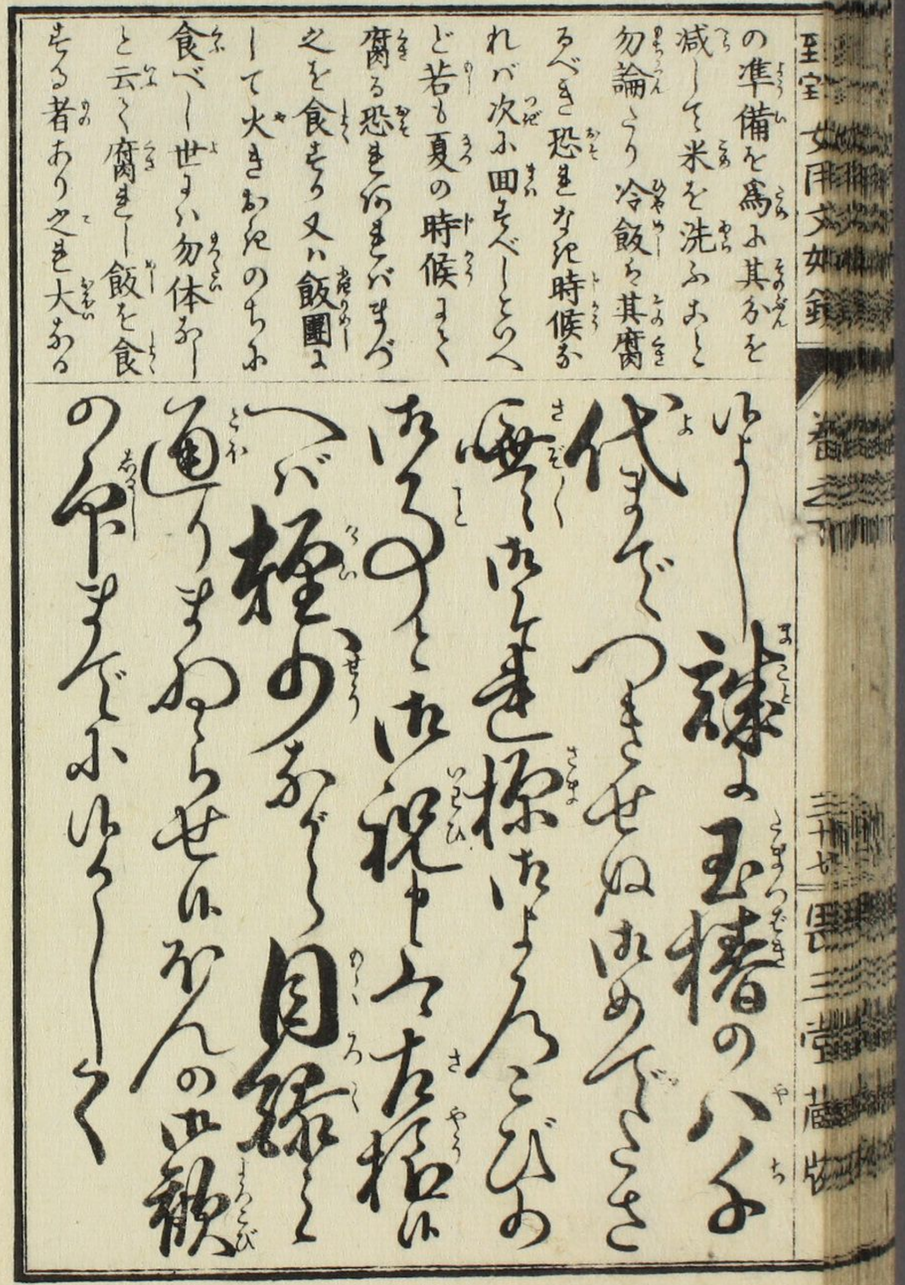
○誰々さまもれ吹挙まして漸く役目仰せつけられ○雖
さまの出見ねてそ出宮出しまた○久しくなりまるもの
遊び酒に折うし傳結樣作せ分られ○異ひも考らせ
ぶらさん○手内まねり廣世れや上の○宮家出佛ぶ上下

ゆり故ふ十日より餘多
ふ舂ぶろしぶ
○澡糖の入物ハ米櫃の
中へ置べしらば兎も角
ともべ傾て米と混淆
ふなり易し
○飯を家内中の人數
ふ應じて炊べし尤も人
の多少ありて日ふ三度
又ハ二度炊もあるべど何
も一日丈ふ限るべし
飯の餘りたる時ハ翌日

○婚禮の文

一筆めぐらせ申
候樣遊ばされ
候ハ
ば
ば
ば

の準備を爲ふ其分を減じて米を洗ふあと勿論さう冷飯ら其腐るべき恐れなき時候ふれば次ふ四ちべしとの〻ど若も夏の時候まく腐る恐れなきばまづ之を食ちる又ハ飯團ニして火きあれのちふ食べし世ハ勿体ふと云く腐きし飯を食ちる者あり之を大ふ



過ちなり飯の勿体ふきさう我身此ゞ爲ふ下痢を生ず類似コレラまでもなりるあば其身を勿体ふるなり故ふ全く腐きたる飯いよく洗ひ流して糠糊ふもちろう又ハ洗濯糊ふすべし

○味噌を手製ふちる家ハてい常々入用分だけ出し其後をか

○熟語

○ふ嫁ふ孔の市式ふ[illegible]

○ふ嫁ふ孔の市式ふ[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○

なら〜置べし又小買こ
せる家ハ黴の出来ざる

前ふ用ひ尽せ様ふ程
を定めくそわる多く
貯ふたくらべ
○醤油を其器の口を
よく堅くふきたかけば
黴ハ生ぜぬものなり

作せの如く元圓技しハ
様のものゝ塩かむりひれ
やみさしたる技を出来中
さぶそりて玉てひとつ
ふ家質よりハ人ハたゞ私の
をゞはるあ成一のもの紙しまま
のゝ技しの出祝と

り黴ゞ生ずたる時
をよくあらて後ち用ふ
べし黴ハ虫ケゝゆゑ躰
の毒となるあり
○酢を其時用ふべけ
買べし
○塩をめの細ゝきざる
ふ盛ま炭煤又ハ塵埃
のかゝらざる所へつる
置べし水氣ある手ふ
て觸るべくしたゞく
水とかきまぜあり

して除らるれ不出繕とか
黴久しくしく受紙いつしハ
ふ度ゆたくて出屋付くくゝ為
とて酢賀の宴お蓋紀
いもしまふ度こ所ひとう
出ぬ技ひとつ
うしたれ

○醃菜蔬類を漬置と當坐食と別く塩加減を爲たべ〜又漬物を食する時醤油をかけるゝい必らず小血へ多てうけべ〜若〜一服うけまゝ出〜置とゝ

○熟語

○出産を祝文

〜〜〜

んつも〜其貫ひ〜方を食せざまい腐る恐あり〜贈り〜人の心切が無ふなり。さまざまとそを食せば我買〜方が腐るぐ〜とそるとそい其貫ひ〜と買〜と孰が長く持やと見定め烹るべきい烹炙べきい炙てかと烹〜手と尽〜腐らぬ防ぎと肝要とそべ〜

○熟語

○昨夜四安産のこ〜

○祝粽の出祝さてが〜

○即ち粽もい粽らせなう〜

○粽〜しれいも産のこ〜何うめで家

○粽るおとこ〜の〜〜綿〜いこちら

○初粽さ母の出〜ひ母出ふこ母粽の

○魚肉野菜あどい直段安〜とて勝多うひて腐らそるなうも

○飯の都合う又い寒さの爲ふ粥雑水骨董粥なとと炊ういなつタべ〜たけ食あすらぬ様ふ

○産婦一重祝ひ月

○粽の産なぐう

○切の産屋

○産婦の産〜

○産婦の産〜

○産婦の産〜

氣をつけべし　總て是
らの冷たきい人るわ〳〵
嫌あ〳〵果を捨るおと
あり
○下物ハ我身の嗜う
ちゝ世て家内の中ふ嫌
ふものかわきふるものハ
ぞ調理又ハ我身きら
ひあり〳〵て家内一同好
む物を嫌ふ〳〵ものを
○飲食ハ身命をつな
ぐ大切のものなれバ第

○安うあぶ〳〵　○茗荷の子ハ
古安ら瓜のつゝ　茄ハなら
乃云瓜のつゝ　ばせ長の度を
ぬと　ばかりなもの　なハ
妙用　紅なもの　なハ
赤紙一重祝の印とて
白　用ふ　まゝ世ハ先ハ
用事のみあり〳〵

一養生ふたつ〳〵ものを
擇て清潔すて美味あ
るやうふすべ〳〵と肝要
と心べし
○下物を烹炙〳〵之
を黒焦〳〵又ハ汁を吹
こぶら〳〵或ハ食物の
中ふ鼠の糞脱毛ぞの
交りあらハ皆妻女たる
ものゝ不行届きの証據
と知るべし
○戸棚防蠅厨重箱蓋

○熟語
○安産の出祝とて○出ことゝ忌られこと〳〵
出便て○和産の見へども安ことと○ゆ産の見て
安心いきハ○英ものの反物なきもの○御礼
あつうゆ○出ぶんて肥立もよくことゝ

○稱徒のいとひ
隅田の出張宅出ん
出ものゝ今日出稱う
加のよ〳〵花もあるぞ

物等きべ〳〵扉あるもの〳〵戸を閉ぢ蓋あるものゝふさをせぢ又を引出しを引えあ〳〵をとちるハ女の大あ恥と心えべし

○火箸の鏈條をきろ終ふ之を失ふ又を炭をおこるとき鐵槌のかゝりとあ〳〵を引ふ曲らを支あるもうふ曲らを支あるも

○遽火の柄をゆたるぶ

〳〵又を留釘の危を其〳〵ふ置色〳〵ば

○火消壺の蓋ハ夕方見廻り〳〵ちき間をき様ふ〳〵を置べし

○米櫃の蓋をあけはふ〳〵て鼠ふ小便とされ

○熟語

○うね〳〵導ふ溝りに出る在出来て今日〳〵

○せんべより出るうり出べし

○栗秋

○陽田川の命〳〵澄

○塵の灯遊び給ふらあと出

○花のなごめよ第一地ようべ

○なを

○捨てひてのいたのし

○ひ

○ひ

○ひ

又ハ内の掃除を怠りて米を虫屎と一所ふなるべくべく米と盛る前ゝ内を掃除し時々日よ乾べし

○箸の汚たるハ見ぐるしき物なれば是らい竈の下ふ燃べし

○銅鍋を洗ふ内を磨沙して抹るべくべく又餅焼鋼魚炙網の塩氣を脱さべして鉈け

○空腹

幽ふ住家ハ殺ふ如

疾ハ耳ハ山鳴の音文

のゝ人ハ同ゝき妹桂

ハ視ハ下ふ婦丸

ぞんハ男の面ふを

凄ぎハの伏屋そハと

縁青と出べくべくべ

○捅るハい時々干乾べ

べし然し干ぞて役ふたぐるやうにべ

らぞ

○丈鍋を時々之を洗ふゝ乾べし若し洗

べべしを其ふ置く

と紀ハ附たる煤炭が風

の爲ふ飛ちりて諸々の

りのを汚べし

○庖丁ハ時々研て鉈を

見ぐるハ丸ぞ日ふから

ぞ揺ハ咲ふべ

ハ被ふのまねび技

ふ是ぞ丈ハ

ハ知ハ重ねく

あらハ中まねら物ハ

脱し双鋭の鈍らぬ様
わるくし然らざるべ
野菜物を切るに其切
口を赤くして見苦し
きなり
○薑擦子ハ大根生薑
なしの乾らび着たる
い見ぐるしむるもの
なり
○鳥府ハ内を時々張
りて炭屑の漏ざる様
わるくし

○熟語
○勝ハ[illegible]までの庵○うたちばなのうづおいと
なるに香○[illegible]作の高まと仮屋しつらひ○家ハ
見苦しうゆへ[illegible]
○年[illegible]何とまし世[illegible]○うるさ
き世のさ酒ゑあ[illegible]遁世者をすねひ〜○
よるも〜いとまなげ[illegible]
わぎまわらせん

○拙のまし徒遠る
百日思ひ[illegible]なる拙

○箒と采配へ紐の断
たるを〜立ケ[illegible]
らるべ
○雨後ハ必らず傘

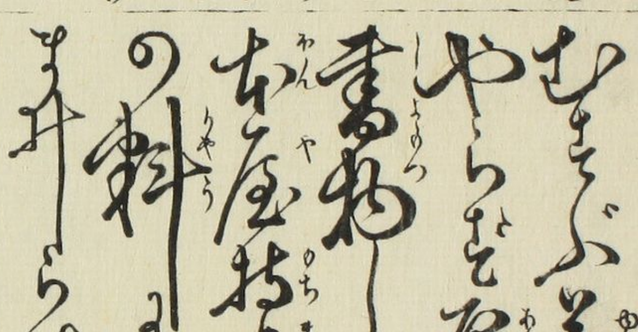
を乾し又下駄を洗ふ
べし但し洗ふに臭
緒を濡し堅く強くも

きなるづつ[illegible]
[illegible]純生[illegible]
[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]
世の[illegible]
[illegible]のびし[illegible]
[illegible]
[illegible]目よさ[illegible]

べくべし

○火を總て燃たる後の薪跋の火をよくく消をべし是を肝要なり又火桶の火を之を烹炭に用ゐる後ち叮嚀に埋みべし夜る寢るとき火桶の火をのくらを消壺に移して消べし

○暗燈の紙を吝て張らざるとき其煤



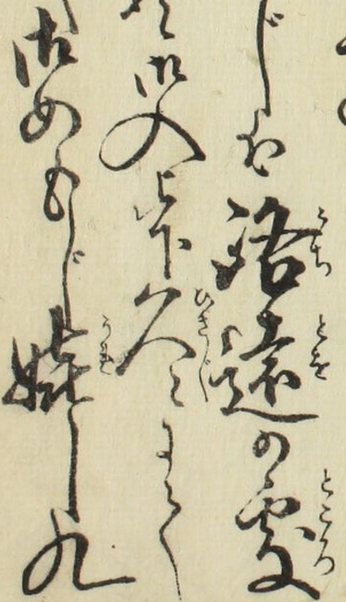
○熟語

○紙白淨純を標とす○松の和らかなる四下水の

しくなる爲に燈心を清さ緒に巾幅の條の長さ一尺程の光り薄きを度々か き立又を燈心を殖を の損ゐり又油を少くつげを熟まりを引くと早きを爲に減ずとも中くと早し

○暗燈の掃除をあをあい燈盞を叮嚀に拭き又其緣に付きたる燈屑をきるに落を肝要とを又洋燈の

○井をきの陸の手くあと都ゐてしく○さく日ハ中屋の橋に永き日ゆくををれ○屋紀伊もて手緒まくく○今ようれ物のる階合乘を居ハ



○返るる

先のを路遠の愛

よくくを学ぶ

ゆるの物を特し丸

掃除あらひわ油をつ
ハ必らず晝の内ゝあらを
べし若し己を得ざ
て夜分ゝあらべきもの
暗燈の手燭に燈をつ
け其他わ火のなき處

わゝしくべし且其掃除

なを仕をやすも四季人の
年毎料理のつゝ出口
よゝしはひきとめのもの
と雖ども悔とも
なしたちこめたる霧の
花の如き花わ

しなる紙を他の反古
紙と別わし火の近き
處わかゝ置べし
⊙洒掃を爲せ少わ第
一氣を附べきわ隅々の
塵埃をよゝ取らと肝
要なり且又戸障子の
骨わゝ残らぬ
やうふるも洒掃の本
色なり
○防蠅厨わゝ
器局膳たゝ推

露を乱を知ずわをだら
つゝ出ぬんを出とを
なやと是まあきめ
思ひの所の出接移
殊よ苦き書物下されば有
ゝ清掃中上わ出合
まで
あらゝ

どん時々内のものを出し叮嚀ふふき掃除もべし

○火桶を毎朝灰をふるひ灰の塊を取り廻りと五徳をよくふくべし

○火桶の引出しふ膏薬蠟燭もぬ油の比ひを入置たらんぞ

○拭布を茶碗膳魚類のと皆別々ふかし其

○熟語

○見どころつもかき年紀ひきこあ中○さぞ〳〵遠慮深の中ものとまるのしいさしの○とまふしは仏ものとまるのしいさしの○ひとしぞ○ねんごろの中返るのごとあそばしの

○病気まうん年

中ものとまるのしいさしの

印を縫つけるべし

○拭布は取りけく清潔ふあるひべし且あるり古けぎる様よ時々新らしき物と取替べし

○烟草盆の唾壺を毎朝清潔よ其内外を洗ひ二ならし三滴しの水を底へ残し置べし

○藥土瓶を用ふるのち藥滓をとの

なるべし

○痛み

○雅

○烟

○何

○ひ一日と日を送り

○お

いまるもきく黴を生せ
しもぐらゝ墨瓶も
きる同ド

○障子い切張いよ
とのゝ花形を裁
て小穴を閉ぐい見ぐ
ろ

○荒布の如き雑布い
却つく拭ところと不
潔るりのなれば決
しをそちゆ使うら
ぎ

ださんれ屋ゝい此一重ゝ
舞まぞこまゝ
れちいぐまゝ
のふ
あらゝかゝく

○熟語

○ぞんの五常の内ぞん者○一うゝぞんド
ゝきぞ○いゝうんぞん○法事
づひ○ぞんうゝ○表面の形うゝ
なわきふんゝ○ふうりをぞゝ

○新大和言葉

いのせゝい
夫婦をいふ
いさり舟ゝい
魚をとる舟ゝ
いさゝひの月ゝい
旧十六夜の月ゝ
いゝぱゝゝい
中たゝゝゝを云
いゝせをせゝい
魚ゝドせゝい
いきゝをたゝい
たゝゝひをいふ

○ぞわぶんれ大切ふこの歩遊○はやゝ中全快遊む
さるやうゝ法ぬんドまゝゝ○ゝまでも中者
生せんゝどんゝまわら弱ゝ

○空腹

先ゝ病氣ゝ
とゝて結構の品頂き
雑有ゝ
よゝどあゝうどんゝ

いつかむしろ
ねあるをいふ
いねしこん
姉をいふ
いろねしこん
いもうとのこと
いみときこん
大そうと詰を
いつづこと
みやげのこと
いへもで草こん
おなじ紙をいふ
いもこかびこん
はらめる女の帯

大ぶ部音
おなじ
おなじ
おなじ
おなじ
おなじ
○熟語
○はやどふねんこと○日をまもる心よ

見ぐるしきこと
きらきらしこん
兄弟のおこなり
花たちぐるこん
昔しをしのぶ
花いろ衣こん
かたりやすこと
きてきこん
有とみまじかこと
はしたなこん
戀をする人をいふ
をなごこの帯こん
ちふしの心のこと

○ひかしきを望決と者とも○ゆきあ
さしたるふもとまじは○ゆえもまじよのなり

○詩音
おなじ
おなじ
おなじ
おなじ
おなじ
おなじ

はつふうとい
神ぬしのことむう
春つげてさきしい
梅の花のこと
もつ代草といい
一月の門松かう
花うこのこと
花を入るかご
さきふみの小屋こい
ゆやしき家の丁
はつかの君こい
かきつばたのこと
すげなきこい
まれうぬきのふ

○熟語

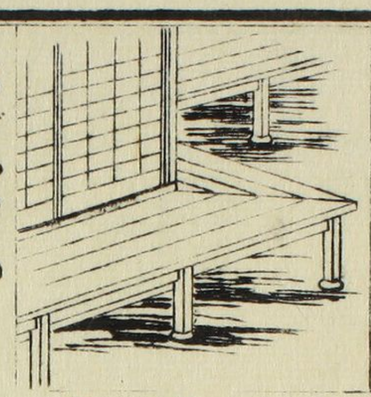
○たき事うね　御事のこころ○先ごろつう風邪
うてうちあれ○ひんのあれの事とぐんでいたま

まあきこうらこい
はつちかりの丁
ふしきこい
あきる丁をこい
まるひこうこい
うづひものこと
まわてうこい
近江の湖水の丁
まかきこい
なしびあひを云
ほしあひこい
たかだかのこと
ほのめくこい
たしうあうぬと

○だんご　医者もうこまをはこしこ○あうゆるよ
きき番を○つひまちろ○おかい○なんだふ深く文
ちまちうあ○ひんのあうり

○悔状

市母様に
ごきあれまして
市母成に抱の中
ゆ文市に
ぶもたうあるこ成い



わとどのとい
らうろのとあり
とゝこんあるとい
むぎのとあり
とうどろもとい
つぐとろのとえ
とぬは木とい
まゝのあとあり

よ山ぬせゝ痛う
ぬ山ぬせゝ痛う
おかゝ
おかゝ
度ぬ
病ぬ
せゝ
ぬ山ぬ
ぬ山ぬ
ぬ山ぬ

とちこちらとい
遠近　をち
をきの上ぜとい
身まーむかと
おぐらぬとい
ら返と　枕詞
ぐらとい
海のおとのふ
ぐらとい
たまくらはと
ぐらいやとい
ぐりの病のこと
ぐらいとい
あくぬをいふ

きはふ日ぐ　ぐ後ぐ
ぐるもの思ぐ後
ぐ深ぐ　ぐ後ぐ　ぐ明ぐ
簾末の非時さ　ぐ
ぐ美　ぐ　ぐ　ぐ
やうぐまもちぐ　ぐ
ふーとぐ

くとうれぶねとい
ぐるかとる紀を云
ぐーー草とい
あふひのことり
ぐねごとい
やとれとり
風見草とい
やるぐのとり
くとのとい
父母　ぐり
ぐらの花とい
月のひとれと
ぐとい
なとれとり

○熟語
○先ぐーを叮嚀ぐ後ぐ　ぐ後前ぐ後ぐ○
屋ぐ内向ぐ○ぐ後ぐ　ぐ後ぐ○
ぐるの南ぐ　ぐ○母の一週忌ぐ○ぐまでの
借ぐ告ぐ　ぐ○ぐ　ぐ○ぐ
ぐんのまねぐ　ぐ十ぐ

○ぐ見ぐ鮮の文
ぐ　ぐ　ぐ
ぐ　ぐ

たちちねとい
父をいふなり
たちちめとい
母をいふなり

たまの緒とい
いのちなることなり
たまぼことい
道のまくら詞なり

たまぐしげとい
簾のあることなり
たまそばめとい
くるまぐるまのことい
たなきとい
商賣のことなり
まいたらねとい
ゆくらふをいふ
そでのしぐらとい
なくなをいふ
そぐろとい
ありもぐさと云こと
つゝふねとい
あるべきこと

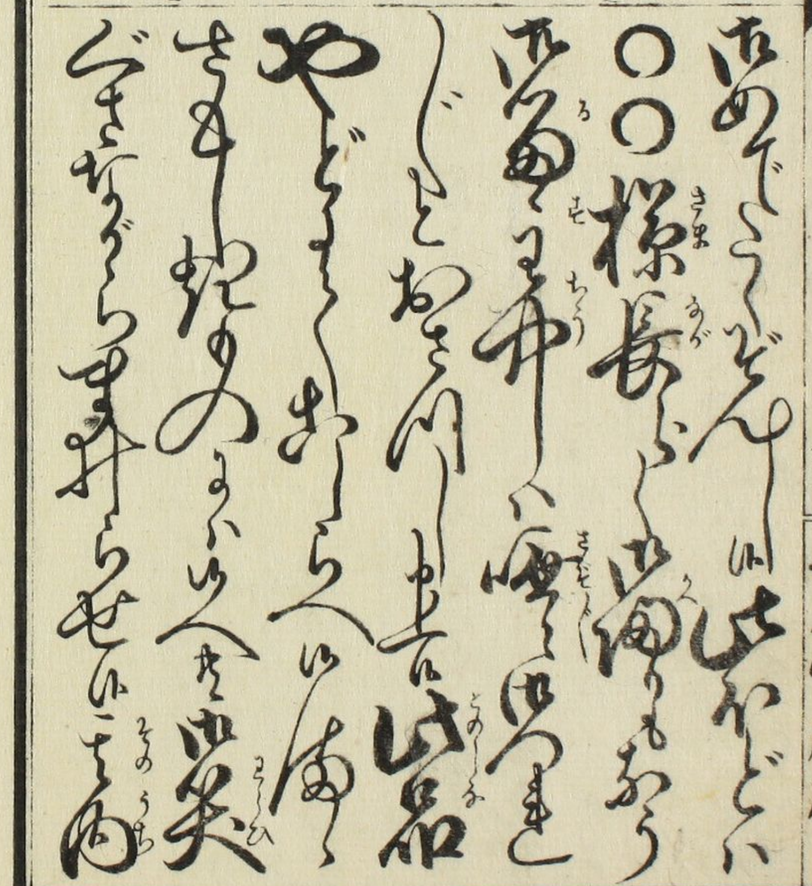
占てはあらず

○熟語

○夕顔をされ共夕のこゝ一つひと百角とゝえあやまり能
つゝみもいとこ歌ゆゑ也色だ一つ半い
○さるもあぐ〳〵れのぐもとせんゆゑ張なるめで
○方角を見ちがひ○宮のくにはぐるまを色でされい
ゆるゆるかなり〳〵いこ〳〵○出けがもなるこ〳〵まこと

○男を見て舞こと文
言ことを書ことを

ねどけ人とん
あーき人のこと
ねぐらとん
ねどこのこと
ねきあれ扇とん
くさみのこと
うらこけとん
うきふ寄れこ
なぐさめとん
いやらしきこと
あぶなきとん
ねんごろである
らうこけとん
品よくこと



らうこけきとん
みぐるしくこと
むらさくこと
ゆるもをいふ
むらもくこと
物さびきこと
むさくあぶこと

○熟語
○なまめく　○猿長　○山林　○月ちゝ　○ふるめく　○山人　○人ぐ　○山面　○山里　○山伏　○山ぶし　○山ぶし　○山ぶし

きくもうるさし
きるぬきつらたと
むべとん
あつさもとらたと
むつの花とん
ぬきのとまり
うづと火とん
下ものうるを云
うるを色きとん
人よあるまぬん
うるをもるむけとん
せんべつのとん
字姫のもー姫とん
むかーきとまり

○回廊んで
留をあるはんと舞として好物
の京深山いで妃あり種
しどんぐまわるせん○○ひる
船るを舞うとん使
られあり伯楽少名
与力先ぐとん刈

うるをとん
水のあらをとん
うるを女とん
娼妓のとまり

うるをとん
はるを花世を云
うるー心とん
きちがいを いふ

姫まわるとう官奏をなど
いるもー お奥ーの侍
ほるを妃のふ ちとう
ぬんわぎまわるせん芸
まぐうるのうるん丸

○熟語
ゆんせう稼ぐ世を意○心ぐけんん
ゆんを舞をつぐき○ちーたうゆーつねぐ写ー丸

海のあとをうら
うらうらとん
さもやうの空を
子供のことをの
鶯そでとん
野守のうぐいす
たかう水のこと
あのこの森とん
めんぐるまと云

○能の「船弁」の文
いつ迄せなう藤
遊うへなうめでたく
ぞんじ候を○○さま

天女のあとかり

難波とり枕詞
つくものこと
外聞こと

御用ゐて遠方に
なされ候日数と
のびるのは
さぞ
有合せの比鐘づめ
そとすると
船弁の前

あわれけ[illegible]
身[illegible]
[illegible]て俗よとん
でもあのとのこと
おのひの珠とい
珠數のことう
おもとのーとい
はづーけとあり
おもとのけ
おもあーうあも
たるをひあり
ふーけ海とい
世界をたゝへて云
ふもーけとい

○○るも世見せ中ゝ成
ゆへども折あり丸まぞ家
しかもこれ用ゐること
つとひとき在世鄭ゐま
ほ秘ひうふーけ秘ゝ中
上りやゝ中ゝたゝのゆーよ
なーけ仰せゝらまてのゝ不

人の死ることい
隠ゐる所あると云
ふもーけとい
不思儀とゆこと
ふゆねのもーとい
うーひあきこと
ふーけとい
雲間の月とい
心づーけのこと
ふぞのうら風とい
うらゝのこと云
やゝけ心とい

古道中ざとねぶん世ゝと
ひ西ぞきれーけうけ
ねん世ゝ中ゝまおゐせゝとゝ

○熟語
○[illegible]
[illegible]
[illegible]

つまれたこころのこと
やしきつくりのこと
日本のまこと
まごころつくこと
正直ふかこころ
きらいらこと
さうのこと
けしたきこと
なのりたこと
けふげしこと
殊勝のこと
ふしの煙こと
こころのえこと

○回復

清きをやうに
過ぎ世ぶれ
ぞんじ
備を○○門出
の古ふうまびこ
寶の品たまはり
あつく出立者

みやこのこと
こちらこれこと
うるさこれこと
このもうのもこと
此面彼面ちう
えやこと
やくびやうのこと
あやふしこと
無益のこと
なのりこと
ちらして知ぬこと
天のそこ立こと
見ぬこと
あらためもせぬこと

古帳ごひよあげるやうゆ
とりもつぐ仮がん名れ
所用ゆきまのの服
もなう出ます
ごまの農業技
所ためのこと
ゆるもこと沢やあげ
屋ごと出ぬ

よろづのもせ如まと
あと人ちきとん
人民のしとなり

あろつちとん
天地ちう
あちろ川とん
ろつもまたとん
あろねさとん
日のいづるとん

熟語

○糸桜のおのめもようやくぬるるまいくようの花
見そめやと思ひたちぬ○うわべ和歌つ和歌の
和歌つ和歌の
死しかたをさまひの男るすかしゆく○昔
横溝ろう巻流れまわる○何つ相庭の前
ものおもしゆくば心ゆるゆく作せりさん屋く○世
別しく何ろうはるか○まやもけとて
○ろつもたびゆくば市ゆくまひもいくとそ○かふも
ゆくまの上とまとまとまと

きりのるとこ
島のきてゐるとこ
めぐるとこ
あひもるとこ
みやびくるとこ
風流のとこ
身をもる雨とこ
なくぐのもり
峰のくらるとこ
ものふるもとこ
思ひだるとこ
くるくると云と

少将よりの返しの文
霧の巻
旅のたもとの巻
たゞ物語の巻
中つ巻

きき島のくもとこ
和歌のとこ
きらなとこ
ぬをひのとこ
きらぎくとこ
くるやもの
きのめとこ
あけぐのあと
ひくち帯とこ
ちぎりむすぶと
ひめのとこ
くる一日のとこ
のくとの煙とこ
くゝぬ思ること

○熟語

○篠を中をいるくいくろくくゝ○篠を中を
ほくとかんそくゝ○恋なくくり○舞のくくま
○ねんごろ○世俗○ものまくくゝ
ひくる○いづま一夜の間のもり
ものくとゝ

篠とのふ
巻上のふ
巻中のふ

○空返
一切
探出る
長の巻

めづらしきこと
禁裏のことゝ
ゆゝち月こと
まんぐつのこと
ちぐさくこと
虫のなくこと
ちみぐものこと
あくてこなり

○用文あづかひ

仮名遣のむつかしきこと和歌のさだめ云〻如くそたゝもちきつぎふあらねど少〻いわゆ〻おきたまきてゆ

中美も海まさぐ山機
嫌毋う山尚も西でもい
ゆ嫌て山人稼もぐ兒
山ゆ稼ぐさまも山晩と
海ゆ丸糸をもとる
備ち山一稼山ゆもひの
山ゆまでふゆ稼せい
鎌て山ゆもぐの
ふゆまあり

ちりのあれ茲ハ用文
よみあらためるあらきを記そべ〻

居位。猪亥蘭。
豕蛸膝行田
舎居藍慈姑。
用隨分。推察。
おまへ皆ゆるゆ
いとかゝ居ゆ
祝謡敬遂洗

○熟語

○暗夜帰京めそばされゆ〻○そそやふ山

追々思買喰
揃迷　こまつらん皆
たぐいとかくこと　老報悔
まて此わろ下まつ紀
たつい大てのひとき
てあ

會繪餉酔笑
彫植居飢末
杖机法會

○劇場中合もの又
舞屋ひなどの狂

らやめうし○何ろりで変ぞ牛い○須戸の月ぶう
の花雪れ名所ろ弁慶ろ家○はわどは菊ろと
ぶんしいらもはやは帰りふあ成○月日はそ紀ろ
いるう殺るばるまよい○さぞろしはうろびとかとね
りし殺しの○用ろつまこ殺者はろ殺ろ家上
いつしは○定ろしあろを探とさろしはは○ゆりしと
ろ体足あまそきんあしは○何も由めましのふしあ

あのろあなろへえを
ろろし

愈麤覺消聞
越肥冴榮絶
生冷吼見燃
右ちえのろふまてへ
ろもあろもかくだろ
らぞこ　江得柄
のわう
をも枝鰕の類を
ぶめ上ふえ
とつくろいえのう
ふなりゆくさろえ

言ふのおよんしきろ
一日見物いてたのも
ふもも出仕ちて
刀ふ合ろ紀出ろ並
ち仰下ろる探ねん
しゆわろ物ふまろと
出ろ命ふのあゆ出

あほえあど上ようくんず
あつるあつふ　考
答譬調扣　あど下よ
へとつくるくのくいえ
ともあともかくぞ必
らぞへのくあくう

尾小緒雄麻
伯父伯母甥
鴛鴦惜荻岡
斧桶長筬居

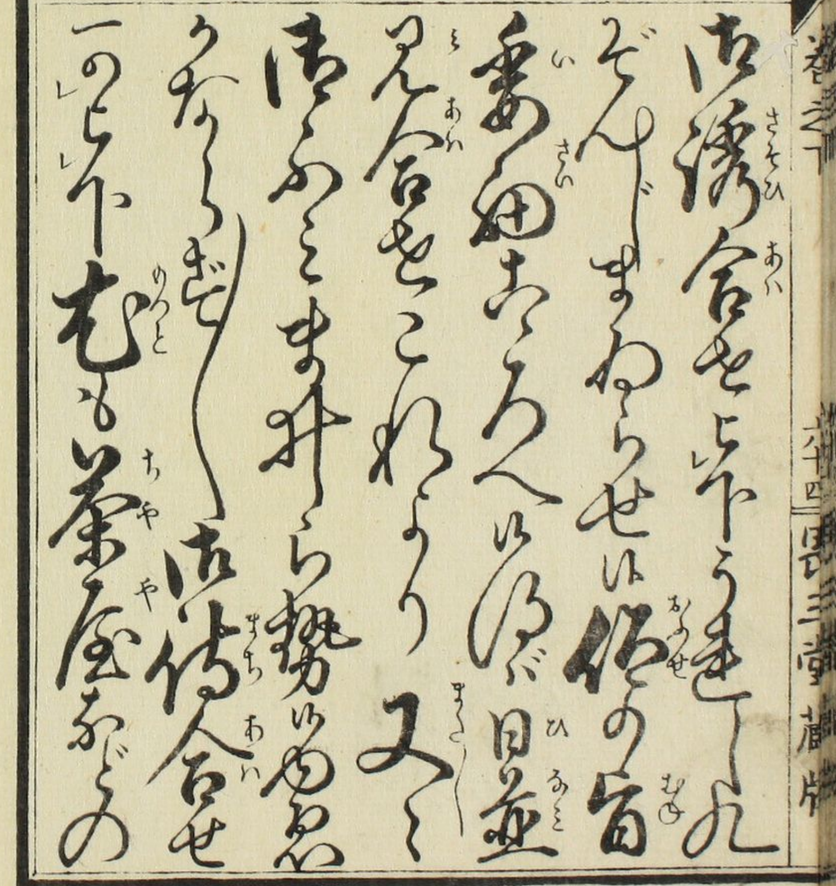
○兼ものの御法度
○誘ひ合ひ
やどりきけりの古樽
○ものの呂やさる尾
○熟語
○此度の狂言を餘りど見どころあるきよう評判
いもの〜○ものの滑か風とおとう浪うきものぐふ

折男女小子
踊拜治教可
咲終幼稚前
年女良花專
魚水標棹青
薫栞
顔三保
塩炎

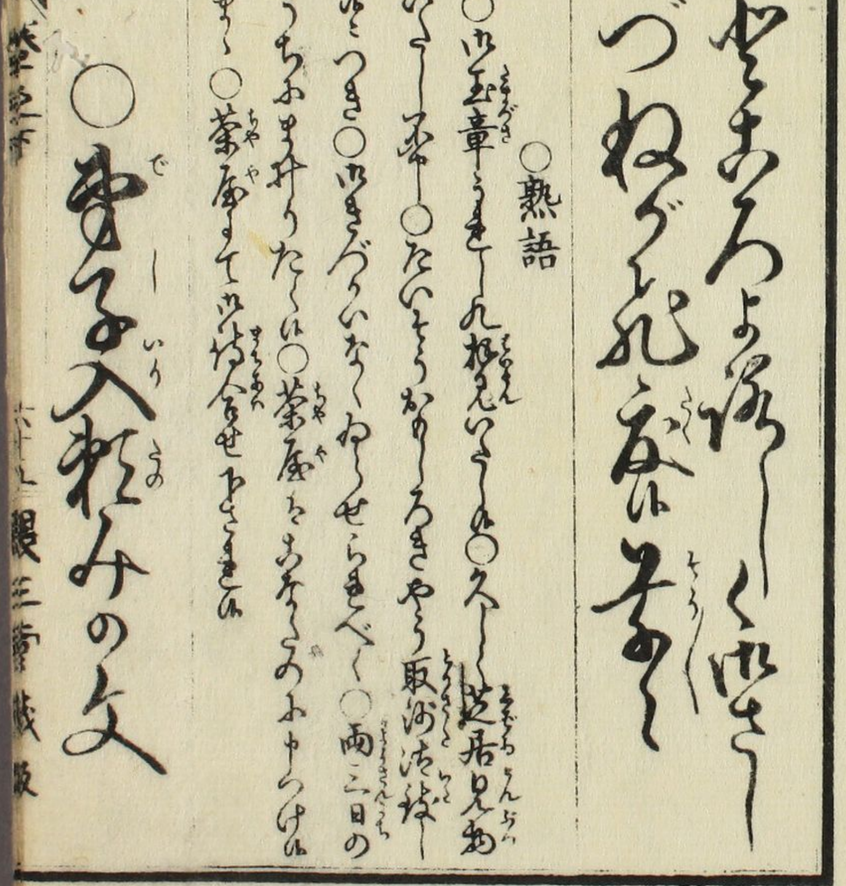
○ものの見ふりけりても敷のはしまあ○君仕のりの〜手前
ものの〜まてやうらせこのとかれ○のづまの返
ものねぐひまあうせい

○ものの
ものの文理屈
ものの世の中
ものの家
ものの一日芝居
ものの幸

ぐひふてにのあり
さまどさにてふは
のはいまふはまも
ともかくあれいこと
いの類まそこともわ
ともかくてかくてら
ぎたぐ中ふもさまる
りのいこのうふまかく
あり則 光皇の音
うあふうにまくく其
外まにらくにに賑い
ににもあちちなどに
るねいまふいふくわ
とう皺浦廻廊



弱鰯泡騒の類
まとトとちといまに
らいきのあり
鯨藤筋氏梶
味恐辻閉耻
臂癖地これらの
外いトの
うふ冨士咒等の
如し
預出渦和屑
削桂授雫賤



○熟語
○ひとつ章うまれ桂えいてうに○久くに迄居兄弟
いてに平に○たいてうかのにろきやう取河法橋
いてつき○ひきづいたくわにせらまべく○両二日の
うちふまに井りたくい○菜屋をもあそこのふやらけに
にく○菜屋すてひきかんせ ちさうまに

○ひとつ入れ組みの文

尋續綴闔撫
泥先水愛煩
このるゐいをふづのう
ふまてすとかくい
數筈抽疵葛
そのわの大うさず
のうふまてよ〜
右の外ゑなづうひの
あとーぶーとのく
どもこふ畧そな
やうなづうひの書ふ
つつくちらべなへ
う〜

いまだたちめのぐ袴は
もねど時ぐらたちひえん
ぐ〜丸をう清掃あ
そぼ〜ぬ船をなうえ
と居めでまてぞんぐは
ぢのどかく〜ぶを振ゆ
ぢ稽ゆ古清新ゆ上〜く

○百人一首讀うと

百人一首を一とうふ字をふくを百人一首と読ならひあり天智天皇いてんぢ持統天皇いぢとう喜撰法師いわつ〜と読へ〜喜撰の外を皆法師とよみ文屋いふんやとまをてまひぐ〜文字も文屋よあらぢを文室とかくべきあり壬生

○安たうう若ちて山氣
のぐ〜掃よりど仰ゆも
山蔭ちを河りやさん
きび〜丸ち世活ふ
ぢやうひとよ
ぢのく中上ちあら

○熟語

○うね〜河噂ユ麓うりを○兼て雑〜さ四うう

を氏のとなへいみふ
とをみく読名所の
となへいみぶとあぶ
うくよむあり坂上
いさかの深養父い
ふりあう文屋朝康い
とるやそとよむべら
らぞ赤染あめんを
あらぞめとあるべ
し紀伊を親王家の
紀伊との文字をそ
つくよむべし○天の
香具山をうぐ山と
あるべし。ひとりうねん

○年賀のもち
ひ
御落居様当年
ゆいもひ
ハ源ば
千鶴
亀の御寿

いひとりうると切て
ねんとよむところあ
るべし。つくもぢねを
つくもとよみくよ
み。人ふあるもそる
よしめるふいぐなと
よみ。人ふもぞあそ
ぬめひをめしがいり
とをみ。あふとのさ
えくしなくべのしの
字をさえくしと切
てなくとよむところ
あるべし。やくやも
しわのいやくやと

うぐりなう目知安年
ぢ
ゆ
ゆ
ゆ

切りくゝ〜わと読
むこゝろあゝ〜。
えやいのふきゝ
〜めゝさいあ
うふのぶきとよむ
べゝらびのゝき
あゝろあゝ〜
さび〜さふやどを
たちのぐなぐむきば
いづゝもおふ〜と読
むべ〜
右の外百人一首よつ
きていめぐきゝあ
もど暑そ

御歌所あゝ
と数る山鶯
まゝ〜世〇御

〇常盤堂雅楽の祝寿〇千歳
〇ぢを石の巌ゝとなるまでは
歌よ作ゆ中手倍ゝ健よ永山拓

〇四方のまつ
祝年賀の
ゝ〜ぢ
ゝ〜ぢ
ゝ〜ぢ

人一流をたて其弟子の山田檢校に至ても〳〵盛んなり去ど八ッ橋生田も猶おとろくぎるなり

○書ふ唐様と和様の差別あり和様とい青蓮院の宮尊圓親王よりはじまり御家流と言ふ其他ハ大抵唐様と知るべし

○画ふも和漢の差別

○物事〳〵の文

あり〳〵漢ハも流儀いろ〳〵あるとて大別それぞれ南画北画の二ッふたきに日本画ハも種々あるとつぐる所ハ四條狩野住吉土佐より出さるものなり

○茶ハ千家と遠州の二ッを本となせ之ふ裏表とて本式と畧式あり

○生花ハ枝ぶりと曲

○熟語

明日ハ北軍いよん

○先ゆゞハ〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵

げ梢をそらせてあるどい
ろ〳〵の樹ぶりふそる
を遠州流といひ枝の
ちゝゐゝ容よく生る
と古流といふまつ此
二流あり
○和歌ふ各の流あり
どゝ之い流儀ふあらそ
して癖ありう萬葉の手
ぶりふ作るめのをバ
國學者の歌と一古今
調ふ作るを歌學者の

○所詠歌○ひわと世の人の○俗ものゝ淫
安住のうゝ中就てきの表捨立ぐ〳〵今ようとなる人
第り○ねゝ〳〵ゝ中家り○偏りふ更ゝ出家○○
ゝ咲ゝ咲ゝ咲

うゝて聞つらゝ

○諸礼い伊勢家と小笠原きゑれと今い小笠原と専らとゝ

ふとゝゝとゝるあり大昔い是をはぎはさぐはぐ等云ゝ祝ひゝゝゝめとゝゝ詞ゝ用ゐゝゝとゝゝ壽の字のゝゝを用ゐぎゝゝゝゝゝ

○ねぎきゝゝゝせのねぎゝい願の義ゝゝり又禱の義ゝゝゝり故ゝいのゝゝゝ幷ゝ祭いの意ゝ用ふゝゝゝゝ

于時明治十八年夏

平田登園書

貴女至宝 大全女用文姫鏡下の巻了

明治十八年一月廿四日版權免許
同　年十二月刻成出版

定價金壹圓

編者　東京府平民　田島象二　下谷區神田五軒町二十番地

出板人　同府平民　須原鐵二　日本橋區西河岸町十三番地

東京府下及諸國書林問屋賣捌所

東京　日本橋通壹丁目　須原屋茂兵衛
同　仝同町　大倉孫兵衛
同　仝同町　小林新造
同　仝通二丁目　稲田佐兵衛
同　仝　小林新兵衛
同　仝通三丁目　丸屋善七
同　京橋區南傳馬町壹丁目　吉川半七
同　京橋區南傳馬町二丁目　穴山篤太郎
同　同銀坐二丁目　報告堂
同　同三丁目　山中孝之助
同　同四丁目　博聞本社
同　同南鍋町天狗書屋　兎屋誠
同　日本橋通一丁目一番地　伊勢金
同　同三丁目　加藤正七

東京　芝區神明前三島町　山中市兵衛
同　同柴井町　上田屋書林
同　日本橋區本町三丁目　金港堂
同　同本町二丁目　柳川梅治郎
同　同四丁目　文學社
同　同大傳馬町二丁目　内田芳兵衛
同　同三丁目　東生龜治郎
同　同通油町　藤岡屋慶治郎
同　同横山町一丁目　出雲寺万治郎
同　同本石町十軒店　江島喜兵衛
同　同　坂上半七
同　同横山町二丁目　内田彌兵衛
同　同三丁目　辻岡文助
同　同馬喰町二丁目　石川治兵衛
同　同　山口藤兵衛
同　浅草區茅町二丁目　北澤伊八

右ニ記載セシ書林問屋之外ハ府下書林并ニ繪草紙店ニ有之候間最寄賣捌所ニ就テ御購求アランコトヲ乞フ

大阪　同府下本町四丁目　岡島真七
同　同心齋橋筋南久宝寺町　前川善兵衛
同　御催後町四丁目　博聞分社
同　同　高麗橋筋二丁目　久榮堂熊谷
同　同南本町四丁目十六番地　書籍會社
西京　同府下寺町通四條上ル　田中治兵衛
同　同河原町通一條下ル　大黒屋書店
兵庫　同府下神戸相生橋際　久榮堂書店
徳島　同縣下徳島中通二丁目　阪井万吉
石川　加賀国金沢書林　牧野雲根堂

熊本　同縣下熊本新二町目　長崎次郎
新潟　同縣下水原駅　西村老書店
同縣下三條駅　樋口屋老書店
同縣下善光寺前　西澤老書舗
同縣下松本南深志町　高見甚左衛門
同縣下千葉　田中鉉次郎
茨城　同縣下横濱弁天通一丁目　師岡屋伊兵衛
同八王子駅　髙島恵藏
同縣下浦和駅　博聞分社
同縣上市　柳且堂

細越